

コードスイッチング研究の概観—多言語社会のコミュニケーション分析に向けて— 田崎 敦子

詳細目次

1. はじめに
2. コードスイッチングの定義
 - 2.1 社会言語学におけるコードスイッチングの定義
 - 2.2 第二言語習得研究におけるコードスイッチングの定義
3. コードスイッチングのタイプ
4. バイリンガル・コミュニティーを対象にしたコードスイッチング研究
 - 4.1 言語学的アプローチ
 - 4.1.1 等価制約と自由形態素制約
 - 4.1.2 マトリックス言語フレームモデル
 - 4.1.3 言語能力とコードスイッチングのパターン
 - 4.2 社会言語学的アプローチ
 - 4.2.1 コードスイッチングの社会背景に関する研究
 - 4.2.1.1 状況によるコードスイッチング
 - 4.2.1.2 有標モデル
 - 4.2.2 会話内コードスイッチング
 - 4.2.2.1 会話内コードスイッチングの機能分類
 - 4.2.2.2 コードスイッチングの談話上の位置づけ
 - 4.2.2.3 コードスイッチングの機能分類の多様性と問題点
 - 4.2.2.4 会話分析によるコードスイッチング研究
 - 4.3 まとめ
5. 第二言語学習者を対象にしたコードスイッチング研究
 - 5.1 第二言語習得研究におけるコードスイッチングの位置づけ
 - 5.1.1 コミュニケーション・ストラテジーとしてのコードスイッチング
 - 5.1.2 第二言語習得研究におけるコードスイッチングの評価
 - 5.2 学習者のコミュニケーション能力からみたコードスイッチング
 - 5.2.1 伝達行為としてのコミュニケーションの観点から
 - 5.2.2 相互作用としてのコミュニケーションの観点から
 - 5.2.2.1 コミュニケーションの定義の変化—伝達行為から相互作用へ—
 - 5.2.2.2 学習者の相互行為能力
 - 5.2.2.3 相互行為能力の観点からみたコードスイッチング
 - 5.3 学習者からバイリンガルへ
 - 5.4 まとめ
6. 日本語・英語間のコードスイッチング
 - 6.1 統語論的特徴

- 6.1.1 等価制約と自由形態素制約の観点から
 - 6.1.2 コードスイッチング可能な日本語の語彙の特徴
 - 6.2 社会的背景の特徴
 - 6.3 語用論的特徴
 - 6.4 学習者を対象とした日英のコードスイッチング
 - 6.5 まとめ
 - 7. 第二言語学習者を対象にしたコードスイッチング研究に必要な視点
 - 8. おわりに
- 稿末注
- 参考文献

コードスイッチング研究の概観

—多言語社会のコミュニケーション分析に向けて—

田崎 敦子

要 旨

本稿では、日本人学生と留学生のコミュニケーションにおける日本語と英語のコードスイッチングの研究に必要な知見を得るために、コードスイッチングに関する研究を概観する。まず、バイリンガル・コミュニティを対象とした研究を、言語学的アプローチと、社会言語学的アプローチに分けて概観し、その意義と問題点を指摘する。次に、第二言語習得研究におけるコードスイッチングの位置づけについて、学習者のコミュニケーション能力に関する研究の流れとともに概観し、コードスイッチングの有効性、問題点について検討する。最後に、日本語と英語のコードスイッチングに焦点を絞り、統語論、語用論、社会背景、第二言語学習者のコミュニケーションの観点からその特徴をまとめる。このように様々な視点からコードスイッチング研究を多角的に検討することにより、日本人学生と留学生のコミュニケーションにおけるコードスイッチングの研究に必要な視点、方法を提示する。

【キーワード】 二言語話者、 第二言語学習者、 留学生、 コミュニケーション能力、 英語

1. はじめに

日本に居住する外国人が増えつつある現在、彼らの中には、コミュニケーションに十分な日本語能力を身に付けていない者も多くなっている。その背景は様々であるが、特に、本稿では、大学で学ぶ留学生について考えてみたい。近年、日本の大学では、国際化の一環として留学生の受け入れを積極的に行っている。その結果、留学生の背景が多様化し、日本語学習歴が皆無、または、非常に短い者が増えている。しかし、彼らは、日本語能力を補いながら、日本人学生や他の留学生とのコミュニケーションに参加し、共に学びながら、学位を取得しなければならない。

日本人学生が日本語能力の低い留学生とコミュニケーションする際には、英語を混ぜて意思の疎通を図ることが多い(三牧 2005)。これには、「国際語」としての英語使用が広まり(八田 2000; Crystal 1998)、多くの日本人学生、留学生の英語能力が向上したことが影響しているだろう。従来、日本人学生と留学生のコミュニケーションの研究では、彼らがどのように日本語を使用し、コミュニケーションを成立させるかという分析が中心であった。しかし、両者に「英語」というもうひとつの共通言語があるとすれば、コミュニケーション達成のために、日本語と英語を併用することも当然考えられる。したが

って、彼らのコミュニケーションの実態を捉えるためには、二言語使用の分析を無視することはできない。

長友(2004)は、現在、日本語が第二言語としてではなく、第三言語(あるいは第四、第五言語)として学ばれ、三言語以上の併用環境の中で使われながら、習得されることが多いと報告している。そして、こうした言語環境に合わせ、今後、日本語教育において、多言語習得・マルチリンガリズム環境を考慮した教育のあり方について、早急に検討するべきであると述べている。日本人学生と、留学生の間では、日本語と英語の併用が、最も身近な多言語環境であろう。彼らの二言語使用の実態を把握するためには、日本語と英語がどのように切り替えられるのか、またその切り替えにどのような効果があるのかという点を分析しなければならない。すなわち、彼らのコードスイッチング(以下、CS)の分析である。しかし、現在、彼らの日本語-英語のCSに関する研究は限られており、研究の視点、方法も確立されておらず、その有効性や、問題の本質を解明するには至っていない。

CSの研究は、主に、移民社会や、旧植民地などのバイリンガル・コミュニティの二言語話者を対象に行われてきた。彼らは、社会の多数派言語である公用語と、自分たちの民族語の二言語を併用しな

がら生活している。バイリンガル・コミュニティで使われる二言語使用と、第二言語学習者(以下、学習者)と母語話者との二言語使用とは、使用目的、社会的背景、言語能力などの面で異なるが、Legenhausen(1991)は、学習者のCS研究には、研究基盤がある移民のCS研究との比較が有効であると述べている。そこで、本稿では、まず、バイリンガル・コミュニティの二言語話者を対象にしたCS研究を概観し、それぞれの研究の視点、その有効性、問題点について論じる。次に、第二言語習得におけるCSの位置づけ、評価を概観し、日本の大学で学ぶ留学生と日本人学生のコミュニケーションに見られるCS研究に、バイリンガル・コミュニティを対象にしたCS研究の知見をどのように応用できるかを検討する。

2. CSの定義

2.1 社会言語学におけるCSの定義

CSは、「二つの異なる文法システムあるいはサブシステムに属する言語の一節を、ことばの一連のやりとりの中で並置すること」と定義されている(Gumperz 1982/2004:73 訳とページ数は花崎の訳書による)。しかし、言語交替については、その特徴により異なる用語も使われている。

個人の言語選択による言語交替には、CSの他に「借用(borrowing)」、「混用(mixing)」(訳:岡 1997)という区別がある。借用は、形態素的、音韻的にベースとなる言語に組み込まれ、その一部となった単語を指す(Grosjean 1982; Gumperz 1982; Poplack 1980)。したがって、借用は、二言語能力を必要とせず、一言語話者にも使われるが、CSは、二言語の能力がないと使われない(Myers-Scotton 1990)。また、CSは、「二つの独自の文法システムのそれぞれの内部規則にそって、話者が意識的あるいは無意識的に作った糸のようなものを、意味のある並置をするということ」(Gumperz 1982/2004:83 訳とページは花崎の訳書による)と言われるように、話し手が意識的にも無意識的にも使うが、借用はほとんどの場合、無意識に使用される。

混用は、文中の切り替えのみを対象にし、ベースとなる言語での表現がわからないときなどに、他の言語を代用する場合に起きる言語交替を指す。混用は、借用のようにベースとなる言語に組み込まれていないため、形態素的、音韻的にベース言語と異

なる点で、CSと共通する。しかし、CSと違い、他の言語の代用にしかすぎない混用では、言語交替自体にコミュニケーション上特別な意味を持たない(Bokamba 1988; Kachru 1978; McClure 1981; Sridhar and Sridhar 1980) (4.2 参照)。

また、借用や混用が文中の単語レベルで起きるのに対し、CSは、ベースとなる言語を持たず、二言語が同等に使われ、言語交替が句や文の間でも起きるため、文間の言語交替のみをCSとするという定義もある(Hoffmann 1991)。しかし、同一談話内で、二言語が同等に使われていることをどのように定義するかは難しい。また、CSのデータの中には、文中で起きる単語レベルの交替も多い(岡 1997; Lindholm & Padilla 1978; Meisel 1994)。このように、実際は、句や文間で起きる言語交替のみをCSと定義し、借用や混用と区別することはほとんど不可能である。

CS、借用、混用の区別に関する議論では、形態素的、音韻的に借用先の言語に組み込まれていない混用をCSに含め、CSと借用の区別のみを行うという見方もある(Grosjean 1982; Jacobson 1990; Nishimura 1992; Pfaff 1997; Poplack 1980; Romaine 1994)。重要なのは、混用とCSの曖昧な区別を明確にすることではなく、「同一発話内で言語が交替する」という行為に注目することだという考えにもとづくものである(岡 1997)。

さらに、Gardner-Chloros(1995)は、CSと混用だけでなく、CSと借用の区別も無意味だと述べている。借用は、もともと外国語であるが、長い間借用先の言語の中で使われる過程で、「借用語」としての地位を確立していく。つまり、CSも借用も、言語交替という流れの一部とみなすことができる(Myers-Scotton 1993a)。その過程では、個人によって使用頻度が異なり、CSと借用語の相違を常に明確にすることは難しいという。また、Nartey(1992)は、アメリカの移民を例にあげ、移民は、英語の正しい発音をマスターしていないこともあり、音韻面でCSと借用を区別できない場合があると述べている。さらに、借用とCSの区別については、個人が属する社会的集団(出身地、居住地域、職場、学校など)によって、独自の慣習、規則を作る傾向があり、既存の規則で判断することはできないという意見もある(Gumperz 1982)。

このようにCS、借用、混用の区別については、

様々な議論があるが、CS 研究において、借用を CS の一部とすることには疑問が残る。借用先の言語の一部となり、一言語話者も日常生活で使用している借用は、二言語話者の言語行動の特徴にはならないからである。特に、日本語のように、多くの外来語を日本語の一部として使用し、借用語のように扱っている言語では、借用と CS を同一視した場合、CS 特有の機能、役割が見えてこない。確かに、借用の定義は、個人の社会的背景により異なる。しかし、本来、CS の機能分析には、社会的背景の考慮が不可欠であり(4.2 参照)、そこから、CS と借用の区別をするための基準を見出すことは可能であろう。

混用については、形態素、音韻の面でベース言語と異なるという特徴が CS と重なるため、CS との区別が難しい。特に、学習者の場合、言語能力の不足から、目標言語の代用として、他言語を使うことが多い。それは、言語交替の大きな特徴のひとつであり、CS 分析の対象に含める必要がある。このような立場から、学習者を対象にした CS 研究では、混用は CS に含めるが、CS と借用は区別するのが妥当であると考えられる。

2.2 第二言語習得研究における CS の定義

第二言語習得研究において、CS は、目標言語の能力不足を、第一言語や第三言語で補う方法として捉えられてきた(Bialystok 1990; Faerch & Kasper 1983; Poulisse 1993; Tarone 1977, 1983)。この意味では、2.1 で述べた混用と同義である。

その中で、Cook(2001)は、参与者の理解の面から、学習者の言語交替を区別している。話し手が言語を切り替えた場合、切り替えられた言語を聞き手が理解可能な場合は、その言語交替を CS とし、聞き手が理解できない場合を「言語スイッチ(language switch)」(筆者訳)とした。例えば、日本人と日本語学習者の日本語のコミュニケーションで、日本語学習者が英語に切り替えた場合は、日本人にも理解可能であるため CS となる。しかし、母語を共有する日本語学習者同士が、日本人には理解できない自分たちの母語を使用した場合は、言語スイッチとなる。CS は二言語を対象に考えられる傾向があるが、グローバル化に伴い、コミュニケーションの参与者の言語背景が多様化する中、このような多言語使用の言語交替を前提とした分類も必要になるだろう。

3. CS のタイプの分類

CS のタイプの代表的な分け方に、「付加的 CS(tag switch)」、「文間 CS(Intersentential switch)」、「文中 CS(intrasentential switch)」(筆者訳)がある(Poplack 1980)。付加的 CS とは、一方の言語の文構造には統合されず、単語や句などの小さな単位が付け加えられただけの状態を指す。英語では、“right”、“you know”などを、日本語では、「えっと」、「あの」などが該当する。こうした短い発話は、無意識に発せられることが多い。文間 CS は、二つの節、または文の境で起きる切り替えを意味する。文間 CS には、一人の話し手が、節、文ごとに言語を切り替える場合と、話し手が交替したときに、使用言語が変わる場合がある。これに対して、文中 CS は、同一節、または、同一文内で言語が交替する現象を指す。

こうした CS のタイプの分類は、言語が切り替えられた位置、ターン交替などの観点から CS を分析するには有効であろう。しかし、実際は、付加的 CS、文間 CS、文中 CS の区別は常に明確ではない。例えば、前の発話に対して、“right”とのみ応答し、ターンを渡してしまう場合、この“right”が、文間 CS か、付加的 CS かという判断は難しい。つまり、付加的、文間、文中 CS は、その形式だけでなく、発話意図、機能、前後の発話との関連などを考慮しなければ区別することができないということになる。

4. バイリンガル・コミュニティを対象にした CS 研究

CS の研究が始まった 1950 年代には、二言語話者の CS は、教育の低さや二言語のどちらかの能力不足から来る言語の混在、インフォーマルな話し方という否定的な見方が強く、CS の文法的規則、コミュニケーション上の機能について研究されることはほとんどなかった(Benson 2001)。しかし、移民社会や、旧植民地で、二言語能力を有する住民からなるバイリンガル・コミュニティが形成され、その住民を対象に CS 研究が学際的に進められると、CS の機能が次第に明らかになった。本章では、CS 研究の歴史が長く、多くの知見が蓄積されているバイリンガル・コミュニティにおける CS に関する研究を概観する。

バイリンガル・コミュニティを対象にした CS 研究は、様々な視点から行われているが、大別する

と、心理言語学的分析、言語学的分析、社会言語学的分析に分類できる。心理言語学の分野での CS 研究の主な目的は、二言語話者がどのように2つの異なる言語を脳に蓄積しているのか、どのような心理的要因が CS を引き起こすのかという問題を解明することにある。この分野での知見は、社会言語学における研究やバイリンガルの定義についての議論で触れることから、ここでは、言語学的アプローチ、社会言語学的アプローチを中心に概観する。

4.1 言語学的アプローチ

CS に関する初期の研究は、言語学の分野が中心であった。言語学の分野における CS 研究では、二言語の語順の制約を確立することが主な目的であった(Pfaff 1976; Poplack 1980, 1981; Sankoff & Poplack 1981; Sridhar & Sridhar 1980)。以下、言語学的アプローチによる CS 研究を概観する。

4.1.1 等価制約と自由形態素制約

代表的な CS の統語規則に、等価制約(equivalence constrain)と自由形態素制約(free morpheme constraint) (訳:岡 2002)がある(Poplack 1980, 1981; Sankoff & Poplack 1981)。等価制約とは、2つの言語の語順が一致している部分のみで CS が起き、語順が違う箇所では、言語交替は起きないというものである。例 1 の英語とスペイン語の文では、語順が同じなので線で区切った部分では、統語規則に反することなく CS が可能ということになる。

例 1)

English: I	told him	that	so that	he would bring it	fast.
Spanish: Yo	le dije	eso	pa' que	el la trajera	ligero.
CS: I	told him	that	PA'QUE	LA TRAFERA	LIGERO.

(Poplack 1980)

一方、自由形態素制約は、形態素にもとづいた規則である。形態素には、独立して使用できる自由形態素(free morpheme)と、常に他の形態素に付随して使われる拘束形態素(bound morpheme)がある。自由形態素制約によると、自由形態素と拘束形態素の間では、CS はない。つまり、例 2 の場合は、英語の自由形態素“EAT”と、スペイン語の拘束形態素“-iendo(-ing)”との組み合わせであるため、このような CS は起きないことになる。

例 2) *EAT-iendo (Poplack 1980)

しかし、これらの規則は、英語とスペイン語など統語的に類似した言語間の CS のみを対象にしており、語族が異なり、語順が違う言語間の切り替え

には適応されないことが実証されている(Myers-Scotton 1992, 1993b)。例えば、Azuma(1996)、Loschky(1989)、Nishimura(1995b)は、日本語と英語、Bokamba(1988)は、スワヒリ語と英語、Bentahila & Davies(1983)は、アラビア語とフランス語、Boeschoten & Verhoeven(1987)は、トルコ語とオランダ語など、統語的に異なる言語間の CS の例をあげ、等価制約と自由形態素制約が無効であることを示した。

これに対し、Poplack, Wheeler & Westwood(1989)、Sankoff, Poplack & Vanniarajan(1990)は、等価制約に反する言語交替の例は、CS ではなく、借用、または臨時借用(nonce borrowing)(借用語として、そのコミュニティに定着していない語彙)(筆者訳)であると反論した。しかし、前述したように、CS と借用の区別は常に明確でないことを考えると、この反論も説得力に欠けるといえる。

このように、等価制約と自由形態素制約は、言語により適応されない場合があり、規則としては限界がある。しかし、CS が不規則に起きるのではなく、ある言語規則にもとづいていることを示し、言語学的分析の基礎を作った Poplack の研究の功績は大きい。

4.1.2 マトリックス言語フレームモデル

Myers-Scotton(1993b, 1998)は、Poplack(1980)をはじめとした一連の言語学的研究が、CS された部分の統語的位置のみを研究対象としていることを指摘し、こうした研究にとどまっていたは、特定の言語間で起きる CS の局所的な規則の提示から発展できないと批判した。CS の言語学的分析を深めるためには、その普遍的な規則を確立する必要があると述べ、スワヒリ語、英語の CS をもとに、文中 CS の形態統語的(morphosyntactic)パターンに注目した「マトリックス言語フレームモデル(matrix language frame model)」(筆者訳)を考案し、CS の統語規則を一般化した。

このモデルは、産出された CS の文をもとに、二言語を「マトリックス言語(matrix language)」(以下、ML)と、「従属言語(embedded language)」(筆者訳)(以下、EL)に分け、それぞれの働きから文中 CS の統語規則を示したものである。

ML とは、システム形態素となり、形態素の語順を決定する言語を指す(Myers-Scotton 1993b; Myers-Scotton & Jake 1995)。二言語のうち、積極的に使用

される言語には、優先言語(dominance language)、ベース言語(base language)と呼ばれるものもある。しかし、優先言語もベース言語も、会話全体を通して使われるという点で、一文単位で決められる ML とは異なる(Bentahila & Davies 1992; Myers-Scotton 1993b; Nortier 1990)。さらに、優先言語は、二言語のうち、能力の高い言語と定義されるが、ML の定義は、能力と関連付けられていない(Bentahila & Davies 1992; Myers-Scotton 1993b)。

また、ML 言語フレームモデルでは、システム形態素と内容形態素の区別が重要となる。システム形態素には、量を示したり、ある量の中から特定したりするなど、その働きが「量」と関連するという特徴がある(Myers-Scotton 1993b)。例えば、指定辞(specifiers)や限量詞(quantifiers)、所有形容詞(possessive adjectives)、格や性別などを表す屈折(inflections)などがある。一方、内容形態素は、名詞、動詞、形容詞、前置詞などの形態素で、テーマを示すことが、その基準となる。テーマを示すとは、動詞、話題と意味上の関連を持つことである。

Myers-Scotton(1993b)は、こうした ML、EL、システム形態素、内容形態素の概念を使い、以下の原則を示した。

・「形態素語順の原則(Morpheme-order principle)」
(筆者訳)

文中の形態素の割合は、ML が高い。また、語順は ML の規則に従う。

・「システム形態素の原則(The system morpheme principle)」(筆者訳)

システム形態素は、主に ML で形成され、対象となる発話の形態統語的フレームを作り、そのフレームの中に EL の単独の語彙(名詞、名詞+修飾成句など)が挿入される。

ML は、EL より優位に使われるが、EL は島(句や、名詞+修飾成句)を作り、その中の形態素は EL の規則に従うこともある。このような現象が生まれる背景には、ML と EL の一致度が関連している。

ML と EL の一致度が低い場合、ML と EL の間に言語交替が生じない場合がある。一致度は、主に、テーマとの関係からみる。テーマを示す内容形態素、つまり、名詞や動詞、形容詞などは、一致度が高く、容易に言語交替がある。一方、テーマと無関係のシステム形態素は、一致度が低く、

システム形態素のみの切り替えはない。これを「ブロッキング仮説(The Blocking Hypothesis)」(筆者訳)という。

しかし、ブロッキング仮説により、ML と EL の間の CS が不可能になった場合も、実際は CS が観察されている。これは、「折衷戦略(compromise strategies)」(筆者訳)が働いたためである(Myers-Scotton 2002)。折衷戦略には、名詞のみを切り替える“bare forms”の使用や、膠着語に見られる“do-verb”構造の使用、内容形態素とシステム形態素から形成される EL の島の利用などがある。例えば、“taken for granted”などの成句は、結束力が強く、成句の持つ意味がテーマと深く関連しているため、そのままの形、つまり島として ML で使われる(Myers-Scotton 1993b)。

また、英語が ML で、日本語が EL の場合の CS には、以下のような文がある。

例 3) What do you call it *nihongo de*?

(Myers-Scotton 2002)

この文は、等価制約に反するが、Myers-Scotton(2002)の折衷戦略にもとづき、名詞“*nihongo*”とシステム形態素“*de*”が島を作り、英語の文に組み込まれることで、CS が実現している。また、日本語が英語を取り入れる場合、「英語の動詞+する」という形で、CS が起きることがあるが、これも do-verb 構造を利用した折衷戦略と考えれば、説明可能である(6.1 参照)。

ML 言語フレームモデルの普遍性は、文生成の心理言語学的モデルを応用している点からも実証できる。文生成には、2 つの段階があるといわれている。まず、統語的フレームをつくり、その中で、語彙や節、韻律的構造や、位置の調整をしていく(Bock 1991; Garrett 1990; Levelt 1989, 1992)。ML 言語フレームモデルにおいて、システム形態素が ML で形成され、形態統語的フレームが作られるのは、この文生成の最初の段階、つまり、文のフレームを作る部分に相当する。そして、他言語から語彙や節を挿入させることは、第二段階の語彙や節の調整に当たる。

さらに、話し言葉で起きる間違いのメカニズムの考えにも裏づけされる。Garrett(1990)によると、我々が、話の中で、間違いをする際、動詞、名詞などの「開かれたクラスの語彙(open class items)」(筆者訳)は入れ替わるが、冠詞、前置詞、助動詞、

複数を表す“-s”などの「閉ざされたクラスの語彙 (closed class items¹)」は、入れ替わらないという。例えば、“We’ll sit around the song and sing fires”という文では、“song”と“fire”が入れ替わっているが、“-s”は残っている。これは、ML 言語フレームモデルにおいて、ML のシステム形態素によるフレームは切り替わることがないが、自由に動くことができる内容形態素が CS されやすいという仕組みと同じである(Myers-Scotton 1993b)。

このように、ML 言語フレームモデルによる CS の文産出の仕組みは、話し言葉の文生成、間違いのメカニズムからも説明可能であるとし、その普遍性をさらに強化した。

言語の切り替えの位置を局所的に捉え、対象となる言語の相違に対応できなかつた等価制約と自由形態素制約に対し、ML 言語フレームモデルは、CS の形態統語的(morphosyntactic)メカニズムを一般化したという点で、大きな功績であり、現在、最も広く使われている CS の統語規則である。しかし、二言語が同等な形で同じ会話の中で使われる例もあり(Muysken 1997)、二言語併用場面で、ML と EL が常に明確に分けられるとは限らない。こうした CS の現象を考えると、ML 言語モデルの限界も認めなければならない。

4.1.3 言語能力と CS のタイプ

Bentahila & Davies(1992)は、「言語の優勢(language dominance)」(筆者訳)という概念を使い、言語能力と CS のタイプの関連を示した。言語の優勢とは、話し手の有する二言語のうち、能力が高い言語が優先的に使われる状況を指す。

Bentahila & Davies(1992)は、モロッコのアラビア語、フランス語の二言語話者の自然会話に見られる CS のタイプを、年配グループと若者グループで比較した。その結果、二言語の能力に差がある場合、それが、CS のパターンに影響することがわかった。年配グループは、フランス語で教育を受けた世代で、アラビア語もフランス語も高いレベルを有する、いわゆる「均衡バイリンガル」(5.3 参照)である。若者グループは、科学系やフランス語の授業以外は、アラビア語で教育を受けている。彼らは、フランス語で自己表現はできるが、フランス語使用の場面は限られており、年配グループに比べると、フランス語能力は低い。

この2つのグループの CS のタイプを比較した結

果、年配グループでは、文間 CS が最も多く観察された。一方、アラビア語の能力の方が高い若者グループが最も多く使用したのは、アラビア語の文にフランス語の名詞を挿入するパターンである。これは、若者グループのフランス語の能力が低く、フランス語のみで文を作ることが困難であることが起因しているという。

しかし、統語規則を考慮することのない文間 CS、付加的 CS に比べ、ある言語の統語規則に合わせて、別の言語の単語や句を挿入する文中 CS は、二言語の規則を統語的に融合させる高い能力が要求される。そのため、一方の言語が低い場合には、むしろ文間 CS や付加的 CS が多いという報告もある(Gumperz & Hernandez-Chavex 1972; Poplack 1977, 1980; Weinreich 1968)。特に、助動詞、代名詞などを変えるのは高い言語能力が必要とされる(Gumperz & Hernandez-Chavex 1970)。また、両言語の統語的規則を崩すことのない名詞のみの交替は、最も一般的であり、能力に関係なく生起するともいわれている(Lindholm & Padilla 1978; Meisel 1994)。実際、言語の優勢を提唱した Bentahila & Davies(1992)自身、「均衡バイリンガル」も、文中 CS を使う可能性は高く、言語の優勢と CS のタイプの関連は、普遍的なものではないと述べている。Berk-Selingson(1986)も、ヘブライ語とスペイン語の二言語話者を対象に行った研究で、能力の相違が CS のタイプに影響することはないと結論づけている。

二言語能力の相違に注目し、CS のタイプを分類した研究は、産出された CS のみを分析するのではなく、その能力との関連を示し、CS の要因のひとつを明らかにした点で興味深い。しかし、CS のタイプと言語能力の関係については、様々な解釈がある。Bentahila & Davies(1992)が述べているように、言語の優勢と CS のタイプは常に一定ではないということは、言語能力と CS のタイプの関連は、CS 分析に用いる概念として普遍性に欠けることを意味する。CS のタイプは、言語能力だけでなく、社会的背景や言語の役割、参与者の立場なども含め、様々な要因を考慮し、綿密に分析する必要がある。

4.2 社会言語学的アプローチ

CS の統語的規則を主な研究対象とした言語学的分析に対し、社会言語学では、CS が起きる社会的、心理的要因や、対人関係、話題などとの関連について考察し、そこから CS のコミュニケーション上の

機能を明らかにすることを目的とする。

社会言語学アプローチには、マクロ的視点、ミクロ的視点からの分析がある。マクロ的視点からの分析では、CS が使われているコミュニティの社会的特徴を調べ、CS に与える影響を明らかにすることを目的とする。よって、CS 使用の社会的背景や、二言語の社会的位置づけなどが主な研究対象となる。一方、ミクロな視点から CS 分析をする目的は、主に、実際の会話の中で使われる CS の機能分類をすることにある。CS の社会言語学的研究では、このマクロ、ミクロの両面から研究しなければ、社会における CS の実態を捉えることはできず、CS に関する普遍的理論を構築することもできないといわれている(Narley 1992; Ure 1974)。

本節では、まず、CS と社会的背景の関連についての研究、つまり、マクロな視点からの CS 研究を概観し、次に、ミクロな視点から行った CS の会話上の機能についての研究の流れを見ていく。

4.2.1 CS の社会的背景に関する研究

言語学的アプローチにより、CS の統語的規則の確立などを目的とした研究は、産出された CS を対象にしているが、こうしたプロダクト中心の研究に対し、CS が生起するプロセスにも注目するべきであるという考えから、その社会的背景に関する研究が行われた。

4.2.1.1 状況による CS

Gumperz(1982)は、移民社会の CS を「状況による CS(situational CS)」と「会話内 CS(conversational CS)」(訳:花崎 2004)に分類した。ここでは、「状況による CS」についての研究を概観する。

「状況による CS」とは、コミュニケーションの場面や活動、相手の変化に伴い起きる言語交替である。二言語使用のコミュニティによっては、歴史的、また社会的要因から、一方の言語に高い地位や権力がある、いわゆる「ダイグロシア(Diglossia)」という状況が存在している。ダイグロシアの状況下にある話し手は、社会生活を営むために、二つ以上の文法システムを知らなければならず、多くの場合、その二言語を状況によって切り替えて使っている。その言語選択には、特定の、制限された活動(公的な交渉、特別な儀式、言葉遊びなど)、場所(家、学校、職場など)、または、相手(家族、友達、社会的に身分が下、または上の人など)、などが影響するといわれている(Blom & Gumperz 1972)。Gumperz(1982)

は、アメリカに移住したスペイン語話者を対象に CS を分析した結果、学校、職場などの公的な「場面」、正式な交渉や特別な儀式などの「活動」、職場や役所関係の「相手」、経済、政治、科学などに関連した「話題」には、英語が使われていることがわかった。一方、スペイン語コミュニティの家族や友人などとのくだけた場面では、スペイン語が話されていた。この場合、ひとつの場面、活動、相手に合った言語が決められている。つまり、言語使用と社会状況には、一対一の対応があり、それぞれの言語がそれぞれの場面で特定の地位や機能を持つ。

バイリンガル・コミュニティにおいて、その社会背景から、ひとつの言語が特定の状況に使われるという規範が作られると、CS は安定したものになり、話し手も CS の使用方法を学びやすい。こうした CS は、話し手が規範を意識して行っているため、コミュニティの人々に対するアンケート調査や、言語使用の記録、インタビュー調査などで引き出すことが可能である。

4.2.1.2 有標モデル

Myers-Scotton(1988, 1993b)によれば、CS 使用は社会的状況と深い関連があり、話し手が CS を使うときには、社会的動機付けがあるという。それは、会話の中で自分をどのように位置づけるかということ、つまり、人間関係における「権利と義務("rights-and-obligation sets")」(筆者訳)の調整であると述べている。この動機付けをもとに、Myers-Scotton(1993b)は、CS のタイプを「無標 CS(The unmarked choice)」、「有標 CS(The marked choice)」、「探索的 CS(The exploratory choice)」(筆者訳)に分けた。これを「有標モデル(The markedness model)」(筆者訳)という。

無標 CS は、場面や話題、参加者のアイデンティティの変化など、固定された要因によるもので、それは、コミュニティの規範として参加者に共有されている。したがって、その場で参加者の権利と義務は自動的に決まり、自然に言語が切り替えられる。4.2.1.1 で述べた Gumperz(1982)の状況による CS がこれに相当する。例えば、アメリカに移住したスペイン語話者が、家族と話すときにはスペイン語を使うが、ビジネスの相手とは、英語を話すということがある。この言語交替は、社会的規範で決められており、話し手はその規範に従う義務がある。

一方、有標 CS の場合、言語選択の権利は話し手

個人にあり、会話のプロセスの中で、必要に応じて、何か特別な意味を伝えたり、態度や立場を変えたりしながら、人間関係を調整するために使われる。この場合、CS の動機は、インタラクションの流れの中で決まるため、流動的で、話し手にも聞き手にも予測不可能である。したがって、話し手が有標の CS を使う際には、交替の箇所に音声的变化をつけるなど、なんらかのサインを出し、聞き手の注意を引いたり、強調したりして聞き手に知らせる必要がある。Poplack(1988)は、これを「合図(flagged)」(筆者訳)と呼んでいる。こうした有標 CS は、二言語使用の歴史が比較的浅く、CS の規範が確立されていないコミュニティーの特徴だという。バイリンガル・コミュニティーにおける二言語の位置づけにより、無標、有標の相違が明確でない場合もあるが、多くの場合、このモデルは有効だといわれている(Myers-Scotton 1988, 1993b)。

最後の「探索的 CS」は、話し手が、参加しているコミュニケーションのルールや、相手の言語能力や好みがわからないために、無標、有標の区別がつかないまま行う言語交替を指す。

CS 分析には、その社会背景が不可欠な要素であるが、従来の研究では、それぞれのバイリンガル・コミュニティーの社会背景との関連から、そこに見られる CS の特徴を示したものが多し。しかし、有標モデルは、話し手の社会的動機のみから、CS のタイプを一般化し、さらに、そのタイプとバイリンガル・コミュニティーの社会背景との関連を示した点に意義がある。今後、新たに生まれるバイリンガル・コミュニティーの CS 研究においても、その社会背景との関連を見る場合や、歴史ある安定したバイリンガル・コミュニティーとの比較を行う際のひとつの指標となるであろう。

4.2.2 会話内 CS

4.2.2.1 会話内 CS の機能分類

状況による CS は、一場面に一言語が対応し、その規範も明示されやすい。しかし、CS の中には、その規範に従わず、同じ場面の会話内で生起するものもある。これを「会話内 CS(conversational CS)」(訳:花崎)という。会話内 CS は、話し手が、やりとりの中で、自分の発話の意図を相手にどのように解釈してほしいかという情報を隠喩的に伝えるためのものである。会話内 CS は、その場のコンテクストへの依存度が高く、その規範を一般化することは難

しい(Gumperz 1982)。このような会話内 CS の機能を使うためには、そのグループ内で共有された目に見えない規範を生活の中で習得することが前提となる(Gumperz & Hernandez-Chavez 1972)。したがって、二言語話者が、他のグループの二言語話者と話す際には、ある程度、聞き手の背景や態度がわかるまで CS は使わないという。規範を共有していない相手には、CS がどのような意味を伝達するかわからず、誤解を生む危険があるからである(Gumperz 1982)。逆に言えば、規範を共有しているグループ内のメンバー間でしか使われない会話内 CS は、グループの仲間意識を示すことになる(Gumperz 1982; Pfafl 1979)。

グループ内外の CS の使い分けについて、Gumperz(1982)は、“we-code”、“they-code”という概念を用いて説明した。二言語使用のコミュニティーでは、マイノリティーの言語である民族語が、そのグループのメンバー間だけに通用する言語、すなわち“we-code”となり、公用語などのマジョリティーグループの言語で、政治や教育などの場面で使われ、ある権威を持つと見なされる言語が“they-code”となる。こうした相違は、旧植民地や、移民社会で見られる現象であり、“we-code”を使うことには、同じ民族同士のアイデンティティーを共有し、仲間意識を確認するという意味がある。

しかし、Gumperz(1982)は、CS とグループのアイデンティティーとの関係は象徴的なものであり、個々の CS と直接関連しているわけではないと断っている。会話内 CS の機能には、コンテクスト、社会的な前提、話し手自身の知識などがより大きく影響するという。

このように会話内 CS に注目した Gumperz(1982)は、3つの異なるバイリンガル・コミュニティーの会話を録音し、談話分析の手法で、CS を抽出し、共通に見られる機能の類型を示した。以下に、その機能リストをあげる。

1) 引用(quotation) :

話し手が、第三者の話を引用する際に言語を切り替え、話し手と第三者、または、引用内容との距離を示す。

2) 聞き手の特定化(addressee specification) :

話し手が、言語を切り替えることで、複数のコミュニケーションの参加者の中で、語りか

ける相手を特定し、その他の参加者を除外する。または、特定の聞き手の注意を促す。

3) 挿入(interjections):

ある言語で何かを思いついたとき、それをフィルター、間投詞、感嘆詞として発話の途中に挿入する際に、それまで使用していた言語を切り替える。または、その内容に感情的により近い言語、より適切に表現できる言語に切り替える。

4) 繰り返し(reiteration):

メッセージの内容を別の言語で繰り返し、情報を明確化したり、強調したりする。

5) メッセージの限定(message qualification):

主要なメッセージの内容を限定するために、その部分だけ異なる言語を使う。

6) 個人的・客観的情報の区別

(personalization versus objectivization):

話し手にとって、ある言語が公的な内容を表現することに適しており、その言語を使用することで、話し手と内容に距離をおき、内容を客観化したり、権威を示したりする。また、別の言語は、個人的な感情を伴う発話をする際に適しており、それを会話の中で使い分ける。

(訳: 花崎(2004)、一部筆者訳)

Gumperz(1982)自身が述べているように、こうした機能分類の提示により、それまで二言語話者に意識されなかったCSのコミュニケーション上の働きが客観的に示された。また、その後のCSの機能分析の基盤となり、CS研究の可能性を大きく広げた。

4.2.2.2 CSの談話上の位置づけ

Gumperz(1982)は、前述したCSの機能や、CSによる“we-code,” “they-code”の区別が、コミュニケーションの参加者の中で共有されれば、CSが談話進行のサインである「コンテキスト化の合図(contextualisation cues)」(訳: 出原 2004)として働くと述べている。コンテキスト化の合図とは、会話の中で、発話と共に使われ、コンテキストから推測できることを知らせる言語的特徴である(Gumperz 1982)。例えば、ある発話の意図を正確に伝えるために、話し手が合図として送り、聞き手が解釈する際に利用するリズム、イントネーション、ピッチ、声のトーンなどの周辺言語要素や、ポーズのとり方や割り込みなどの会話方略要素、慣用句などが含まれる。CSをコンテキスト化の合図と見なすことは、CSが

単に言語を切り替えるという表面的な行為ではなく、その切り替え自体があるメッセージを伝えることを意味する。

また、コンテキスト化の合図としてCSの機能がコミュニティ内で共有されれば、CSを使うことにより、そのコミュニティ内に「フレーム」が形成されることになる。フレームとは、言語活動における期待が構造化されたもので、相手の意図を解釈する際に使用するものである(Goffman 1974; Gumperz 1982; Tannen 1984)。コミュニケーションが成功するか否かには、発話の言語的表現だけでなく、聞き手の適切な解釈が大きく影響する。その解釈を助けるのが、フレームである。同じ文化圏内では、フレームが共有されているので、そのフレームを使って、話し手はメッセージを発信し、聞き手はそれを容易に解釈することができる。しかし、異なる文化圏の出身者の間ではフレームの構成要素が異なるため、誤解が生じやすい(Goffman 1981; Gumperz 1982; Tannen 1984)。

フレームには、話し手がどのような意識でコミュニケーションに参加しているかを表す下位分類がある。例えば、「交渉フレーム」と「雑談フレーム」では、その談話の目的が異なるため、談話フレーム内の発話の解釈も変わる。談話フレームの境は、語用論的に、または、声のトーンやイントネーション、言葉の選択など言語的特徴により作られる(Gumperz 1982)。“Well”; “you know”などのディスコース・マーカ―もフレームの境を表すという(Schiffrin 1987)。CSには、こうしたフレームの変化を表す機能もある(Romaine 1994)。Nishimura(1995a)は、日系人がくだけた話題から、真剣な話題に変える場合にCSを使用している例をあげ、それを実証した。談話の境界を示すCSの例は、話し手の態度が変わったことを伝えるコンテキスト化の合図とすることも可能であろう。

一方、Goffman(1981)は、CSが談話内における参加者の「立場(footing)」(筆者訳)の変化を表すと述べている。同じ会話の中でも、人間関係や話題により、その立場は変化する。例えば、一人の人物が、家族と話しているときは民族語を使うが、相手が職場の人になると、多数派の言語を話すことがある。このCSは、家族の一員から、職場で働いている者へと立場が変化したことを表している。こうした立場の変化は、同じ談話内でも起きる。Kachru(1978)、

Sridhar(1978)は、話し手が、CS により話し方を変えることで、その場の話題に対する知識や立場を示すとし、CS のこうした機能を「役割の確認(role identification)」(筆者訳)とよんだ。談話内の話し手の立場に注目した点で、Goffman(1981)の立場の変化の概念と共通する。

コンテキスト化の合図やディスコース・マーカ、話し手の立場の変化を表す手段として CS を捉えたことは、CS の談話上の働きを抽象化したという点で、意義のある知見である。

4.2.2.3. 機能分類の多様性と問題点

Appel & Muysken(1987)は、Mühlhäusler(1980)が示した言語機能をもとに会話内 CS の機能を、以下のように分類した。話し手は、これらの機能の中から、コミュニケーション上の必要に応じて、その場に合った言語を選択するという。

「参照(referential)」: 言語能力の不足から、ある情報を伝えることができない場合に、他の言語を使う。

「指示(directive)」: 聞き手の限定や、聞き手の好みに応じて言語を切り替える。

「表現(expressive)」: 話し手の多言語能力を示す。

「交話(phatic)」: 会話のモードや話し手の立場を変える。

「メタ言語(metalinguistic)」: ある言語で表現した内容に別の言語で詳細を加えたりする。また、二言語の対比を利用し、説明を際立たせたりする。

「詩的(poetic)」: CS を利用して、冗談を言ったり、詩的な表現を創造したりする。

(筆者訳)

Appel & Muysken(1987)の機能分類は、「指示」、「メタ言語」など、Gumperz(1982)の機能リストと重なる部分もあるが、Gumperz のリストには見られない「表現」、「詩的」機能など、CS を使って会話を楽しむという「言葉遊び」の要素を取り入れている点が特徴的である。

この他、CS の機能に関する研究は、異なるバイリンガル・コミュニティを対象に、数多く行われている(ナカミズ 1996; Auer 1984; Azuma 1993; Foto 1990a, 1990b; Gardner-Chloros 1991; Heller 1988; McClure 1981; McClure & McClure 1988; Myers-Scotton 1993a; Nishimura 1995a; Wei 1994)。これらの機能分類は、共通部分も多いが、その対象コミュニ

ティーによって全く異なる機能も含む。こうした相違は、CS の機能がコミュニティ特有のものである(Appel & Muysken 1987; Auer 1995; Bentahila & Davies 1995; Ellis 1989; McGroarty 1998; Siegel 1995)。

Gumperz(1982)自身、それぞれのコミュニティにおいて、その成員がコミュニケーションという社会活動を通して、独自の CS の規範を作り上げ、それにもとづき CS は解釈されると述べている。そして、自らが作成した機能リストでは、コンテキストや聞き手の解釈がどのように影響しているかを示すことができないという欠点があることも認めている。

確かに、Gumperz の機能リストは、話し手が意識していない CS のコミュニケーション上の働きを明らかにした点で、CS 研究に大きな貢献をした。しかし、コミュニケーションを、参与者の相互作用によって作られる動的なプロセスと捉えた場合、CS の機能をリストにし、予め特定することには問題がある。こうした問題に対応しようとしたのが、次節で紹介する Auer の会話分析の視点を採り入れた CS 研究である。

4.2.2.4 会話分析による CS 研究

本節では、機能リストに対する問題を整理し、その問題に対応した研究を見ていく。Auer(1995, 2000)、Bentahila & Davies(1992)は、Gumperz(1982)の CS の機能リストに対する具体的な問題点をあげている。第一に、機能リストでは、CS の前後の発話がどのようなものか全くわからず、何を基準に機能を判断したのか不明であることを指摘している。CS は、場面や参与者によって、異なる意味が創造される可能性がある。特に、Gumperz(1982)が、CS をコンテキスト化の合図と捉えた点をあげ、コンテキスト化の合図の意味は、会話の流れの中ではじめて解釈可能であることから、会話のプロセスを詳細に分析しなければ CS の意味を理解することはできないはずだと述べている。

第二に、CS の機能リストで、機能と形式が混同されている点を批判している。例えば、「繰り返し」、「挿入」などは、構造上の「形式」であり、「機能」ではない。「繰り返し」という行為を通して、確認や強調の機能が働くのである。第三に、引用や繰り返しなど CS の生起する場所を特定することは、二言語の切り替えの方向性を全く考慮していない点をあげている。例えば、「繰り返し」としての CS

でも、聞き手の二言語能力が同等な場合と、能力に差がある場合では、その意味が異なる可能性がある。同等な場合は、強調となっても、差がある場合は、聞き手の能力を考慮して、能力が高い言語に言い直したに過ぎないということもある。このように、相手の言語能力や好み、またそのコミュニティの規範などで、CS の機能は変わり、固定できるものではないことを主張した。

最後に、CS による個人的・客観的情報の区別は、特定の会話コンテキストの分析から、話し手の意図や背景知識、聞き手の解釈、社会的前提など複雑なコミュニケーションの要素を詳細に分析しなければ断定できないことであり、この分類についても疑問視している。ただし、Gumperz(1982)自身も、この区別に関しては、象徴的なもので、個々の CS を説明するものではないと断っている(4.2.2.1 参照)。

こうした問題を解決し、Gumperz の研究を進展させるために、Auer(1984, 1995, 2000)、Bentahila & Davies(1992)は、会話分析の手法を用いて CS の機能を示すことを提案している。会話分析では、発話機能を参加者のやりとり、コンテキストから分析することが前提であり、事前に規定することはない。この方法により、前後の発話との関連を見ながら、CS がなぜ使われたのか、どのような意味を持つのかということ、より詳細に分析することが可能となり、その多様性にも対応できるという。

CS の機能の多様性を重視した Auer(2000)は、その機能を文脈から独立して特定するのではなく、文脈のどのような要素と関連しているかという観点から、個々の機能を分析する際の枠組みを提案した。談話構成に関連した「談話関連 CS(discourse-related CS)」と、参加者の言語能力、好みを配慮した「参加者関連の CS(participant-related CS)」(筆者訳)という分け方である。談話関連 CS は、話題や、参加者の立場、活動タイプの変化に伴い、より適切な言語を選ぶ場合に生起する CS で、言語を交替することで、談話構成の変化を相手に知らせる働きをする。「参加者関連の CS」は、聞き手の能力や好みに合わせ、聞き手の不安や不快感を取り除くために行う言語交替である。Gumperz(1982)の分類と異なり、聞き手への配慮を取り入れている点に、Auer が話し手と聞き手のインタラクションを重視していることが表れている。

様々な言語、文化背景の人々の地球規模の移動

が増え、バイリンガル・コミュニティの規範が多様化すれば、CS の機能、意味はさらに広がる。その中で、コミュニティの相違を越えて、CS の機能を一般化することは非常に難しいだろう。また、一般化することにどのような意味があるのかという疑問も残る。CS の役割、機能の実態を捉え、CS をコミュニケーションの手段のひとつとして確立するためには、個々のコミュニティの背景とコミュニケーション場面の状況を考慮した、より詳細な分析が求められる。その際、Auer の提唱する会話分析による CS 研究の重要性がより高まるであろう。

4.3 まとめ

本章では、バイリンガル・コミュニティを対象にした CS 研究を概観した。CS は、まず、その統語面が注目され、次に社会言語学的研究、心理言語学的研究へと進められてきた。その流れの中で、CS が社会背景や、コミュニケーションのコンテキスト、参加者の意図と深く関連していることが解明された。また、CS が、コミュニケーションを豊かにする手段であることもわかった。これらの成果は、バイリンガル・コミュニティの CS が単に言語能力や教育の低さから使われるものではないことを実証したという点で、大きな意義がある。さらに、こうした CS の研究は、グローバル化の中で生まれつつある新たな多言語社会のコミュニケーション分析に対し、その多様性、独自性を尊重しつつ、複数の言語を使用することを肯定的に捉える視点を提供した。この点においても、バイリンガル・コミュニティと対象にした CS 研究の功績は大きい。

5. 第二言語学習者を対象にした CS 研究

CS は、移民や旧植民地の二言語話者だけでなく、学習者のコミュニケーションにおいても観察される現象である。本章では、学習者を対象にした CS 研究を概観する。

5.1 第二言語習得研究における CS の位置づけ

5.1.1 コミュニケーション・ストラテジーとしての CS

第二言語習得研究において、CS は、学習者のコミュニケーション・ストラテジーのひとつとして捉えられている。コミュニケーション・ストラテジーとは、外国語によるコミュニケーションで、話し手が問題に直面した際、その問題を解決するために試みる様々な手法である。本節では、コミュニケーション・ストラテジーの中で、CS がどのように位置

づけられているのかを見ていく。

Canale & Swain(1980)、Canale(1983)は、応用言語学の観点から定義したコミュニケーション能力に、文法能力、談話構成能力、社会言語学的能力とともに、方略的能力を含めた。以後、コミュニケーション・ストラテジーの重要性が注目されるようになり、様々な視点から研究が行われるようになった。

研究の視点により、コミュニケーション・ストラテジーの定義、分類は異なるが、大別すると、相互行為的アプローチと心理言語学的アプローチによるものに分けることができる。相互行為的アプローチでは、コミュニケーション・ストラテジーを、やりとりの中で話し手と聞き手が言語知識や、社会文化的知識の不足を埋めながら、理解を図るための相互行動であるとし、その結果、達成される相互理解をコミュニケーション・ストラテジーの本質とみる(Tarone 1977, 1983)。

これに対して、心理言語学的アプローチによる研究では、産出された言語ではなく、コミュニケーション・ストラテジーが産出される認知的なプロセスが注目された(Bialystok 1990; Faerch & Kasper 1983; Poulisse.1993)。Faerch & Kasper(1983)は、その過程を計画・実行の段階に分け、それぞれの段階で、直面している問題に対応するために、コミュニケーション・ストラテジーが使用されるとした。そして、その問題は、聞き手がいなくても起き、聞き手なしでも解決できるという考えにもとづいて捉えられている。

2つのアプローチは、分析の視点は異なるが、コミュニケーション・ストラテジーの分類には、重複する部分も多い。以下、主な分類をあげ、その中でCSの位置づけを確認する。

Tarone(1977, 1983)

回避ストラテジー(avoidance strategies) :

話題を避けたり、途中で放棄したりする

- ・ 話題回避(topic avoidance)
- ・ メッセージ回避(message avoidance)

達成ストラテジー(achievement strategies) :

様々な方法を使い意味を伝えようとする意識的な言語の転移(conscious transfer)

- ・ 表現できない言葉に類似した言葉の使用 (approximation)
- ・ 造語(word coinage)

- ・ 婉曲な表現の使用(circumlocution)
- ・ 言い換え(paraphrase)
- ・ 他言語からの直訳(literal translation)
- ・ 第一言語や第三言語への切り替え (language switch)

非言語行動(mime)

援助の依頼(Appeal for assistance) :

確認要求をする、わからない表現を聞くなどして、相手に助けを求める

Faerch & Kasper(1983)

回避ストラテジー

形式上の削減(formal reduction) :

音韻、形態素、統語規則など言語面の省略

機能的削減(functional reduction) :

話題やメッセージの回避

達成ストラテジー

代償ストラテジー(compensatory strategies)

- ・ 第一言語や第三言語への切り替え (codeswitch)

- ・ 言語間の干渉(inter/intralingual transfer) :

L1 や L3 の規則を L2 にも使用する中間言語にもとづくストラテジー(interlanguage based strategies)

- ・ 一般化(generalization) :

L2 のある規則を不適切な箇所にも使用

- ・ 言い換え(paraphrase)
- ・ 造語(word coinage)
- ・ 再構成(restructuring)

協力ストラテジー(cooperative strategies) :

相手に助けを求め、インタラクションを通して問題を解決する

非言語ストラテジー(non-linguistic strategies)

復元ストラテジー(retrieval strategies) :

求められている語彙が自分の知識の中にあることはわかっているが、すぐに出ない場合、適切な語彙を思い出すまで待つ、他の言語を使って適切な語を探す、などの行動をとる

どちらの分類においても、CS は、コミュニケーションの成立に貢献する達成ストラテジーとして捉えられている。“language switch,” “code switching”と名称は異なるが、他言語を使用することにより問題を解決するという定義は同じである。また、第一言

語だけでなく、第三言語などへの切り替えが含まれる点も共通している。

しかし、この定義だけでは、戦略として CS がどのように使われるのかはわからない。例えば、日本語の「watch されて」(Nishimura 1995b)のように、目標言語の一部を CS することにより、二言語の形態素が結合し、新たな語彙の形を作り出すこともある。これを造語とみることもできるであろう。

また、Faerch & Kasper(1983)、Tarone(1977, 1983)が、CS を「助けを求める」という行為に含めていない点にも疑問が残る。特に、Faerch & Kasper(1983)は、助けを求める行為を、協力戦略と分類しているため、彼らが CS を話し手と聞き手のやりとり、協力を必要としない戦略と見ていることがわかる。しかし、CS は、本当に、話し手ひとりで達成できるコミュニケーション・戦略だろうか。CS を使った際に、相手がどのようにそれを理解するかは、達成戦略としての機能に大きく影響する。しかし、CS 使用の場合、切り替えられた言語での表現を、相手が正確に理解したか、また、それが文脈にあった適切なものであったかどうかは、相手の反応を見なければわからない。特に、第三言語を使用する場合には注意が必要である。つまり、CS を使って問題を解決するためには、相手の反応、応答が必要であるため、相手との積極的な関わりが不可欠となる。また、CS により、わからない語彙を相手に伝え、対応する目標言語の語彙を聞き出すという行為も十分考えられる。このように、CS を使ってコミュニケーションを成功させるためには、話し手と聞き手のやりとりが必要であることから、CS には、協力戦略の要素も含まれていると考えられる。

しかし、相手との関わりを考慮しない CS の見方は、他の研究者の分類にも見られる。Tarone(1977, 1983)と同じく、相互行為的アプローチを採る Dörnyei & Scott(1995)は、問題解決のために話し手が行う行為にもとづき、コミュニケーション・戦略を細かく分類した。その分類は、メッセージの回避、言い換え、省略、非言語などから成る「直接戦略(direct strategies)」、相手に助けを求める「インタラクション・戦略(interactional strategies)」、フィルターや繰り返し、理解を装う「婉曲(indirect)戦略」の3つから

なり、その中で、CS は「直接戦略」に分類される。CS を、相手とのやりとりを行わず、伝達しようとする行為を途中で放棄するメッセージの回避や省略と同じ「直接戦略」と見なすことは、コミュニケーションのプロセスにおける CS の働きを全く考慮していない分類ではないだろうか。

こうした問題は、コミュニケーション・戦略が話し手中心の分類であり、コミュニケーションの協働構築という視点を十分に採り入れていないことに起因すると思われる。コミュニケーション・戦略を相互行為と捉えている Tarone でさえ、その分類は、話し手の行動のみを説明したものである。実際のコミュニケーションにおける戦略としての CS の機能を示す際には、聞き手の役割も含めた相互行為の詳細な分析が求められる(Wagner 1983; Williams, Insoe & Tasker 1997)。

5.1.2 第二言語習得における CS の評価

本節では、第二言語習得研究における CS の評価について見ていく。目標言語の能力が十分でない学習者の CS は、主に第一言語への切り替えである。従来、第二言語習得における第一言語の使用は、目標言語使用の回避として否定的に評価され、学習の妨げになるという見方が主流であった。その背景には、学習者が、第二言語を第一言語と同じ方法で習得すべき、すなわち第二言語のみで学ぶべきであるという考えや、異なる二つの言語は、別々に使われるものであり、第二言語のみで思考する訓練をするべきだという考えがある(Cook 2001)。

Cook(2001)は、こうした第一言語使用の否定的意見は、根拠のないものだとして反論している。第一、第二言語の習得は、年齢や状況が違うため、習得のプロセスに相違があるのは当然であるという。また、第二言語は第一言語から独立して学習されるべきだという考えも批判している。第一、第二言語には、音声、語彙、統語面で共通部分もある。それが学習を助けることもあり、第一言語の使用には意義があると述べている。

第二言語習得研究における CS 研究には、外国語の教室内での第一言語使用の効果を示すものがある(Cook 1999, 2001; Franklin 1990; Legenhausen 1991; Macaro 1997; Ogane 1997)。これらの研究では、教師が、文法説明や、語彙の意味確認、タスクの手順説明、学習者をほめるときや叱るときに信憑性を表すときなどに第一言語を使用すると効果的だといわれ

ている。また、学習者と教師、学習者間の人間関係の構築や維持、学習者の緊張感の緩和などにも、第一言語の使用が有効であるという結果もある。Cook(1999, 2001)は、学習者全員が第一言語を共有しているにもかかわらず、教室で全く使用しないことは、むしろ不自然なコミュニケーション場面を作ることだと捉えている。

学習者の教室外のコミュニケーションで使われるCSについても、近年、肯定的な見方が出ている。Young(1999)は、二言語の知識がある学習者が、教室外でコミュニケーションする際に、両言語を使うことは自然な現象であると述べている。CSは、彼らの言語リソースの表れであり、それを活用することを、二言語話者の特性と見るべきだとし、学習者のコミュニケーションの実態を理解するためには、第二言語習得研究に、こうした社会言語学的視点を取り入れる必要があると主張している。Kasper & Blum-Kulla(1993)も、学習者のCSを言語リソースと捉え、CSを欠点と見なすだけでなく、その機能、正当性も分析すべきだと述べている。

また、CSについては、コミュニケーション・ストラテジー使用の動機という面からもその有効性が説明されている。Poulisse(1997)によれば、どのようなコミュニケーション・ストラテジーを使用するかは、「節約の原理(Principle of economy)」、「明瞭さの原理(Principle of clarity)」(筆者訳)というコミュニケーションの原理(Grice 1975; Leech 1983)にもとづいて決められるという。つまり、少ない労力で、意味を明確に伝えられるかどうか、ストラテジー選択の基準となる。これらの原理は、タスク、すなわち、コミュニケーションの目的や、参加者のアイデンティティ、役割によって調整され、優先順位がつけられる(Rampton 1997; Williams, Inscoc & Tasker 1997)。例えば、学習者がひとりで、ある物について説明することを求められるタスクでは、語彙の不足を補うために、言い換えや描写など、比較的時間のかかるストラテジーが選択されやすい。これは節約の原理に反するが、学習者が自分だけの言語能力で意味を正確に伝えるためには必要な方法であり、明瞭さの原理が優先されたことになる。一方、母語話者との会話では、節約の原理が優先され、短時間で処理できる他言語を使用するストラテジーなどが使われる傾向があるという。ここでは、学習者が伝えたい意味を細かく説明しなくても、母語話者とのやりとり

の中で、意味を明確にすることができるという状況も影響している。こうしたタスクの特性の他に、自分の知性が低く見られることを避けようとする学習者の心理なども、ストラテジーの選択を決定する要因になるという(Poulisse 1997)。

このようなストラテジー使用の背景を考えると、CSは、コミュニケーションの目的、参加者の言語背景(目標言語以外に共通言語があるかなど)によっては、有効な手段となる。わからない言葉を質問する、明確化要求をするなど、母語話者に負担がかかるストラテジーの過度の使用は、話しの流れを止め、レポートの形成を妨げる可能性がある(Aston 1986)。また、話し手の言語能力だけでなく、知性も低く見られる危険性も否定できない(Rich 2006)。しかし、もし、学習者と母語話者の間に目標言語以外に共有できる言語があれば、CSは、母語話者を煩わせることなく、比較的明確に意味を伝えることができるストラテジーとなる。

このように、第二言語習得研究における学習者のCS使用、その意義については、コミュニケーションの目的、母語話者を含めた参加者の背景や心理などを含めて考えられるようになった。こうしたCSの位置づけの変化には、学習者のコミュニケーション能力の捉え方の変化が影響している。次節では、学習者のコミュニケーション能力についての議論を概観する。

5.2 学習者のコミュニケーション能力からみたCS

5.2.1 伝達行為としてのコミュニケーションの観点から

学習者の能力の基準には、コミュニケーションをどのように定義するかが大きく影響する。1950年代から70年代にかけて行われたコミュニケーション研究において、コミュニケーションは、メッセージの伝達行為という直線的なプロセスとして捉えられていた(Berelson & Steiner 1964; Lasswell 1964; Shannon & Weaver 1949)。この定義によれば、コミュニケーションとは、メッセージの送り手が、聞き手に正確にメッセージを伝え、聞き手を説得することであり、送り手が、語彙的、文法的に正しいメッセージを作ることが最優先された。このようにコミュニケーションを捉えると、学習者の言語能力も、語彙的、文法的形式の正確さが基準となる。

学習者の言語能力をその語彙力、文法的知識から判断することは、母語話者の能力を基準にすることもである。学習者が母語話者と比較されてきたこ

とは、学習者を「非母語話者」と呼ぶことに明確に表れている。学習者は、母語話者に比べ、語彙数が少ない、文法的な誤りがあるという点で、「言語能力の劣る者」と位置づけられてきた。こうした能力の基準のもとで、学習者がCSを使用した場合、それは母語話者には見られない言語的特徴ということから、否定的な要素となることは明らかである。

5.2.2 相互作用としてのコミュニケーションの観点から

5.2.2.1 コミュニケーションの定義の変化

—伝達行為から相互作用へ—

コミュニケーション学の分野では、コミュニケーションの定義について様々な議論が展開された。その中で、コミュニケーションを話し手がメッセージを送るだけの一方的な行動と捉えることが批判されるようになった。この定義では、聞き手の役割が全く考慮されていない点が問題となり、その結果考案されたのが、話し手のメッセージに対する聞き手のフィードバックを加えた「相互行為(interaction)モデル」(筆者訳)である。相互行為モデルでは、話し手からの一方向の流れだけでなく、聞き手の行動を含めた点で、直線的なモデルより参加者の行動を配慮したといえる。しかし、相互行為モデルにおける聞き手は、単にフィードバックを送るだけに止まっている点が疑問視された(Miller 2002)。実際のフィードバックは、最初のメッセージの送り手からなんらかの影響を受けている。さらに、そのフィードバックを受け、最初の話し手は、新たなメッセージを送る。つまり、話し手と聞き手の間には、常に相互作用が働いているのである(Barnlund 1970; Burgoon & Ruffner 1978; Dewey & Bentley 1973)。そこには、言語化されたメッセージだけでなく、非言語行動や、コミュニケーションのコンテキストもメッセージの解釈に大きく影響している。こうしたコミュニケーション行為を描写したモデルを「相互作用(transaction)モデル」(筆者訳)という。相互作用モデルは、現実のコミュニケーションの複雑性や、コミュニケーションにおける意味生成の多様性を理解する上で有効であるとされ、現在、コミュニケーションの定義の主流となっている(石井・岡部・久米 1996; Miller 2002)。

一方、社会言語学の分野では、コミュニケーションを、話し手と聞き手の協働構築(co-construction)と捉える考えがある(Jacoby & Ochs 1995)。協働構築の考えでは、話し手と聞き手は、インタラクション

を通して、メッセージの意味、相手との関係、アイデンティティーなどを共に形成していく。そして、インタラクションは、直前の発話にどのように反応するかによって流れが決まるため、常に変化していくダイナミックなものであり、求められる言語、非言語能力は、相手の発話や場面によって変化し続けるという。また、Jacoby & Ochs(1995)は、協働構築には、相手との協力が不可欠であるが、それは、相手に依存したり、相手を助けたりすることではなく、お互いが対等な立場で、関わりあいながらコミュニケーションを成立させることであると強調している。

5.2.2.2 学習者の相互行為能力

前節で、コミュニケーション学、社会言語学の分野におけるコミュニケーションの捉え方を述べたが、どちらの分野でも、コミュニケーションを参加者間の相互作用とし、協働で達成させるものと考えられる点は共通している。このような考えを踏まえて、学習者のコミュニケーションを捉え直すと、その能力の基準も変わってくる。相互作用や協働構築の概念のもとでは、学習者が自分だけの能力で文法的に正確な文を作ることができるだけではなく、相手とのインタラクションをどのように行い、相互理解を図ることができるかという点がコミュニケーション能力の基準となる。

このような考えが重視されるようになった結果、文法や語彙が正確でなくても、自分たちの持っている言語能力を最大限に生かし、学習者が相手とインタラクションを構築し、相互理解を達成することができる「相互行為能力(interactional competence)」(訳:大平 2001)が注目されるようになった(Hall 1993; Kranssch 1986; Young 1999)。相互行為能力は、インタラクションの中に存在する、相手との関わり合いの中で形成されるダイナミックなものである。この点で、従来の外国語のコミュニケーション能力の定義とは異なる。

外国語のコミュニケーション能力については、これまで様々な議論が行われてきた。Chomsky(1965)は、文法的知識や語彙力に関わる言語能力(competence)と、実際にコミュニケーションを行う言語運用(performance)に分け、言語能力を中心的な能力と捉えた。言語運用に関しては、話す際に起きる正しい文法から逸脱した形式とした。言語運用に見られる言語形式の変化は、不注意など心理的要因によるもので、本来の言語能力とは異なると述べてい

る。これに対して、Hymes(1972)は、Chomsky(1965)による言語能力と言語運用の二分法は、言語能力の一側面しか説明していないと批判した。そして、伝達能力(communicative competence)という概念を提示し、そこには、言語能力だけでなく、場面に応じて適切な表現を使うことができる能力も含まれるとした。Hymesの考えをさらに発展させた Canale & Swain(1980)、Canale(1983)は、コミュニケーション能力(communicative competence)は、「文法能力(grammatical competence)」、「社会言語能力(sociolinguistic competence)」、「方略能力(strategic competence)」、「談話構成能力(discourse competence)」の4つの構成要素からなるとしている。

さらに、Backman(1990)は、言語コミュニケーション能力(communicative language ability)という用語を使い、コミュニケーションに必要な能力は、「言語能力(language competence)」、「方略的能力(strategic competence)」、「心理的生理的メカニズム(psychophysiological mechanisms)」から成り立っているとした。言語能力には、文法能力(grammatical competence)、談話構成能力(textual competence)、発語行為能力(illocutionary competence)、社会言語能力(sociolinguistic competence)が含まれる。方略的能力は、コミュニケーションの目的から見て適切な表現の決定、その使用計画、実行などから成り、言語能力から独立させた。そして、方略的能力は、単に言語能力の不足を補うものではなく、言語能力を実行に移すために必要な能力であるとした。さらに、コミュニケーションに関わる知覚神経や筋肉運動などに関連する心理的生理的メカニズムを加え、Canale & Swain(1980)、Canale(1983)より包括的にコミュニケーション能力を捉えている。

こうしたコミュニケーション能力に関する議論の流れは、コミュニケーションの解釈の変化に影響を受けている。コミュニケーションが、伝達行為から、ある社会的コンテクストの中で起きる話し手と聞き手との相互作用という複雑性を持った行為として捉えられると、意思の疎通を図るためには、文法知識だけでは不十分であることが認識された。その結果、背景となる社会規範の理解や、インタラクションの中で起きる問題への対応が重視され、社会言語能力、方略的能力、談話構成能力などが注目されるようになったといえる。しかし、これらの能力は、

実際にインタラクションを展開するためのターン交替や話題転換の方法などについては、ほとんど説明がなく、コミュニケーションの相互作用という行為に、十分に対応した能力の定義とはいえない。

Young(1999)は、インタラクションを実現するために必要なリソースとして、その場面、話題に特有な語彙力、言語構造の知識、参加者の立場の理解、ターンや話題を管理するストラテジー、談話の開始、終了方法に関する知識などをあげている。これらの能力は、あくまでも、インタラクションのプロセスで獲得するものであり、そのときの参加者、状況的文脈により変化するため、コミュニケーションが成功するか否かは、参加者の共同責任であると述べている。

相互行為能力は、学習者が、学習者としての立場で、インタラクションを実現させる能力であり、母語話者との比較で測るものではない。学習者には、学習者特有のコミュニケーションの方法があり、その言語リソースを最大限に活用しながら、インタラクションに参加する方法が重視される。それは、変化する文脈に合わせ、コミュニケーションの方法を調整することであり、そのプロセスでは、言語能力の不足も、相互理解を促進するリソースとなり得る(大平 2001; Ellis 1989; Firth & Wagner 1997; Long 1983)。例えば、母語話者と学習者は、学習者の言語能力を補うために、意味交渉を行うことがあるが、こうした相互行為は、相互理解を深めるきっかけとなる。さらに、その過程で、両者の間には、母語話者同士には見られない連帯感が形成されるという(Aston 1993; Firth & Wagner 1997; Gass & Varonis, 1985; Long 1983; Pica, Lewis & Morgenthaler, 1989; Rampton 1997)。

相互行為能力では、学習過程にある学習者の能力でも、コミュニケーションを達成することができるという前提に立っている点が注目に値する。学習者の中には、目標言語でのコミュニケーション能力を十分に身に付けていない段階でも、社会活動を営み、人間関係を構築しながら、社会の成員となる必要がある者もいる。社会の一員としての活動は、日常のコミュニケーションに参加し、相手の立場になって、相手の特徴、知識、態度などを考慮しながら情報交換を行い、相手と共有できる現実を作ることである(Higgins 1992)。そして、社会における個人のアイデンティティーは、他者とのやりとりを通して

て形成されていく (Higgins 1992; Kramsh 1998; McGroarty 1998; Trosset 1986)。相互行為能力は、こうしたコミュニケーションの社会的意味を認識することにより、学習者のコミュニケーション活動を現実のニーズとして捉え、その能力を評価し、尊重しようとする視点に立っている。また、母語話者の行為も含めて考えている点においても、多様な言語背景の人々のコミュニケーションが増加するグローバル社会に適したコミュニケーション能力の捉え方をしているといえる。

5.2.2.3 相互行為能力の観点からみたコードスイッチング

学習者の相互行為能力が重視され、そのコミュニケーションの参加方法が注目されるようになると、CSの捉え方も変化した。

Ellis(1989)は、コミュニケーションにおいて、学習者がその言語能力を最大限に活用して、意思の疎通を図ろうとした場合、その場のニーズに合わせて、言語変化があるのは当然だと述べている。特に、話すという行動においては、書くときのように、十分な時間を使うことができないため、活用できるリソースが限られている。その結果、文法や言語形式に注意を払うことができず、言語変化が起きやすいという。また、言語変化は、学習者がコミュニケーションを達成させようとするからこそ起きるものであるため、それを単に言語上の誤りとみるのではなく、コミュニケーションの過程における学習者の意図を含めて分析すべきだと主張している。

さらに、Ellis(1989)は、たとえば言語変化があっても、学習者にコミュニケーションの社会的目的があり、それを達成させようとする意思があれば、インタラクションの過程で目標言語の正しい形を学んでいくと述べている。むしろ、重要なのは、学習者がコミュニケーションに参加し、そこで母語話者とコンテキストを作りながら、社会言語能力を身に付けることだという。

学習者の言語変化をこのように捉えた場合、CSも、学習者が、場面や相手に積極的に対応するために使う手段として見直すことができる。Firth & Wagner(1997)は、CSを使うこと自体が問題なのではなく、重要なのは、CSを使った後のやりとりだと述べている。学習者が問題に直面した場合、CSを使い、それがきっかけとなり、母語話者との間に意味交渉が生まれ、相互理解に達することができれば、CSは有効に働いたことになるという。

学習者のコミュニケーションにおけるCSについては、その有効性が認識されつつあるが、これまでの研究では、教室内のやりとりに関するものが多く、教室外で、学習者が社会の成員として活動するための手段としてCSを捉えた分析はまだ少ない。

5.3 学習者からバイリンガルへ

学習者の二言語能力を言語リソースと考えた場合、彼らを「バイリンガル」と定義することは可能だろうか。ここでは、バイリンガルの定義についての議論をもとに、その可能性を探ってみたい。

バイリンガルには、様々な定義があるが、どの定義も二言語の能力を有するという点では一致している(Valdes & Figueroa 1994)。しかし、その能力をどのように定義するかが議論の中心となってきた。従来、二言語の能力は同等であるとする「均衡バイリンガル(balanced bilingual)」(訳:岡 2002)というモデルが主流であった(Broomfield 1933)。しかし、この定義については、いくつかの問題点が指摘されている(岡 2002)。第一に、すべての場面で同等な能力を発揮できる人間はほとんどいないという現実を考慮していない点である(Fishman 1971)。第二に、「同等な言語能力」と言った場合、その「能力」とは何を指し、どのように測定するのかという問題がある(Baker 1993)。基本的な言語能力には、「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」があるが、それぞれの能力は常に同レベルではなく、人によって差がある。例えば、「読む」、「聞く」などの受容技能は高いが、「書く」、「話す」といった産出技能が低い者もいる。また、「聞く」、「話す」という話し言葉は習得しているが、「読む」、「書く」という書き言葉の能力が低い場合もある。第三に、言語能力の範囲は多元的なものであり、上記の4技能の中で、測定可能な下位技能の分類は広範にわたるため、それを特定することは難しい(Carroll 1980)。

第四に、二言語の能力が同じであるという均衡バイリンガルの考え方には、一言語話者の尺度を使っているという問題がある。Grosjean(1985)は、バイリンガルを一言語話者と比較することは、ハードル走者に100mの走者としての速さと、走り高跳びの高さの両方を要求するようなものであり、ハードル走者としての能力を無視しているという例をあげ、均衡バイリンガルの定義を批判している。

さらに、一言語話者との比較は、バイリンガルがどのように二言語を習得したのか、それはどのよ

うに蓄積されているのか、どのように使われるのかという二言語の関係を全く考慮していない(岡 1995)。バイリンガルの多くは、コミュニケーションや、置かれている環境の必要性に応じて能力を発達させており、二言語の能力は場面、話題、相手などによって変わる。人は、一言語を話す際と、二言語を話す際には、異なる能力を使用するため、バイリンガルの二言語それぞれの能力を問題とするのではなく、二言語が混在し、同時に使われる場面を観察し、二言語話者としての言語処理を分析する必要がある(Baker 1993; Grosjean 1985)。

このように、バイリンガルの能力について、二言語の使用方法から見るべきだとする考えが広がると、実際のコミュニケーション場面で行われるCSがバイリンガル特有のコミュニケーション方法として認知されるようになった。

バイリンガルの特性をその二言語の能力の高さではなく、使用方法に見た場合、母語と目標言語の能力を有する学習者も「バイリンガル」として位置づけることが可能になる(Cook 1999; Valdes & Figueroa 1994; Young 1999)。世界中で、様々な外国語を学ぶ学習者が増えている現在、学習者と母語話者のコミュニケーションの機会は、今後さらに増えるであろう。「国際語」と言われる英語を例にとると、外国語として英語を学ぶ人の割合は、英語母語話者の約6倍だといわれている(Kachru 1992)。社会の成員に学習者の割合が増える中で、従来のように彼らを「目標言語の能力の低い話者」として扱い続けると、共同作業や人間関係の構築などに支障をきたし、社会活動が円滑に進まなくなる可能性がある。母語話者と学習者が同じ社会の成員として、コミュニケーションを達成させるためには、学習者の限られた目標言語の能力のみに頼るのではなく、母語話者も自分たちの持っている言語リソースを最大限に活用することを考えていかなければならない。

また、母語話者のような言語能力を身に付ける学習者はほんの一部であることを考えると、学習者を「バイリンガル」と捉え、彼らの持っている言語能力を生かしたコミュニケーション方法を重視し、研究の対象にしていくべきだという主張もある(Cook 1999, 2001; Young 1999)。実際、多くの外国人を受け入れている社会では、学習者と母語話者、また学習者間に二言語、または、それ以上の言語が同時に使用されることもあるだろう。そうした多言語

社会の状況を分析し、彼らの言語環境を把握しなければ、目標言語を使って生活する学習者にどのようなコミュニケーション能力が必要なのかを把握することはできない。

しかし、学習者のCS研究で重要なのは、その有効性だけを取り上げるのではなく、同時に問題点も分析することにある。従来、第二言語習得研究において言われてきたように、CSには目標言語の習得を妨げる側面があることは否定できない。CSの使い方によっては、学習者の言語習得に、または、コミュニケーションの参与者との間に悪影響をもたらす可能性がある。この部分を解明せずに、学習者のコミュニケーションの手段としてCSの有効性を主張することはできないはずである。学習者を「バイリンガル」として位置づけ、その二言語能力活用の効果的な方法を示していくためには、彼らのCSの機能と同時に、問題点とその解決方法を提示するための実証的な研究が求められる。

5.4 まとめ

本章では、第二言語習得研究におけるCSに関連する知見を紹介した。学習者のCSの位置づけは、コミュニケーションという行為の解釈、学習者と母語話者との関係の捉え方、また、CSが第二言語習得に与える影響などが、大きく影響している。地球規模での人的移動が増えている現在、母語話者と共に働いたり、学んだりする必要がある学習者も多くなっている。彼らは、教室で目標言語を学ぶだけの「第二言語学習者(second language learners)」ではなく、「第二言語使用者(second language users)」(Cook 1999)(筆者訳)として社会で活動している。目標言語の能力が限られている第二言語使用者と、母語話者のコミュニケーションでは、他言語の使用が助けとなり、CSが有効に働くかもしれない。しかし、一方で、CSには、目標言語の習得を妨げる可能性もあり、目標言語の習得を最優先させる学習者は、その使用を拒むことも考えられる。また、CSに抵抗を感じる母語話者もいるだろう。社会の成員として活動する第二言語使用者には、現実のコミュニケーションにおけるCSの必要性と、その使用に伴う問題の狭間で、状況に合わせて使っていくことが課題となるだろう。

6. 日本語・英語間のCS

日本語学習者の日本語-英語間のCSを分析する

ためには、日英の CS に関する先行研究の知見を検討する必要がある。日本語と英語の CS については、日本に住む英語話者を親に持つ子供や、インターナショナルスクールに通う子供など、いわゆる「均衡バイリンガル」と呼ばれる二言語話者や(Foto 1990a, 1990b)、海外生活の経験がある帰国子女(Azuma 1996; Maher & 八代 1991)、また、アメリカやカナダのような英語圏に住む日系人を対象にした研究がある(Azuma 1993; Nishimura 1992, 1995a, 1995b, 1997)。さらに、日本人の英語学習者や、日本語学習者など、日本の第二言語学習者を対象にした CS の分析も行われている(久保田 2004; 田崎 2005; 服部 2001; Foto 1990a, Ogane 1997)。これらの研究について、言語学的、社会言語学的観点から、その知見を概観する。

6.1 統語論的特徴

6.1.1 等価制約と自由形態素制約の観点から

4.1 で述べたように、CS の代表的な統語的規則には、Poplack(1980, 1981)、Sankoff and Poplack(1981)の示した等価制約、自由形態素制約がある。ここでは、日英の CS とこれらの規則の関係について明らかになった知見を紹介する。

日本語の語順は SOV、英語は SVO であり、統語面で異なるため(Kuno 1973)、等価制約によれば、日本語と英語の間では、CS は起きないことになる。しかし、実際は多くの CS が観察されている(Azuma 1993, 1997; Foto 1990a, 1990b; Loschky 1989; Nishimura 1995b)。等価制約に反する文には、以下のような例がある。

例 4) We never know *anna koto*.

“We never know such a thing.”

(Nishimura 1995b)

日本語と英語では、目的語の位置が異なるが、例 4 では、英語の目的語の位置に日本語の“*anna koto*”が現れていることから、等価制約が適応されていないことになる。

自由形態素制約も、日英の CS では支持されない。例えば、英語から日本語への CS では、以下のような英語の文に、日本語の拘束形態素である助詞が使われる例が多く見られる。

例 5) Snail は、good です。 (Foto 1990a)

例 5 では、拘束形態素である助詞「は」が、英語の名詞と共に起しており、自由形態素制約に反している。また、他にも、“Mimizu-s”(「みみず」の複

数形)や、“Yukai-ed”(「誘拐」の過去形)などの例も報告されている(Foto 1990a)。しかし、日本語の名詞と複数形を表す拘束形態素、また、動詞と時制を表す拘束形態素との組み合わせは、Nishimura(1995b)では観察されていないため、その使用は不安定であると思われる。

これらの研究から、統語面で異なる日本語と英語の間でも、CS は可能であることが実証された。ただし、日本語から英語への CS では、統語的相違から、統語規則に影響しない名詞、または、文全体の切り替えが多いといわれている(Foto 1990a; Nishimura 1995b)。文中の単語レベルの CS は、一方の言語能力が低いことが要因だという見方もあるが(Bokamba 1988; Kachru 1978; McClure 1981; Sridhar & Sridhar 1980)、日本語-英語間では、二言語の能力が同等でもこの傾向が見られる。

英語ベースで、日本語へ CS される際も、日本語から英語の場合のように、単語レベルの切り替えが最も頻繁に起きるが、日本語への CS の特徴は、名詞ではなく、「ちょっと」、「あの」、「だから」などの挿入が多いことにある(Foto 1990a, 1990b; Nishimura 1995a, 1995b)。これには、統語的規則に触れないという理由に加え、日本語の語用論的な要因も考えられる。この点に関しては、6.3 で詳しく述べる。

また、日本語と英語の CS で特徴的な構造に、「複次構造文(portmanteau sentences)」(筆者訳)がある(Azuma 1993; Nishimura 1995b)。この文は、例 6 に示すように、日本語と英語の文がつながっており、SVOV という構造になる。この場合、最初の動詞は英語で、最後の動詞が日本語となるが、その意味は同じである。

例 6) We bought about two pounds *gurai kattekita no*.

(Nishimura 1995b)

例 6 では、“bought”と“*kattekita no*”が同義である。つまり、最初の英語の動詞が日本語へ CS され、最後の日本語の動詞となったのである。これは、SOV、SVO という日本語と英語の語順の相違を利用した形だといえる。

6.1.2 CS 可能な日本語の語彙の特徴

Azuma(1997)は、日本語では、名詞的要素を含んでいる語彙のみの言語交替が可能であるという規則を提示した。この規則によれば、日本語の名詞は、問題なく英語に切り替えられる。これは、6.1.1 で

述べたように、日本語から英語への切り替えの特徴のひとつである。しかし、実際は、名詞だけでなく、「英語の動詞+する」や、「英語の形容詞+な」というCSも観察されている(Azuma 1997; Nishimura 1995a)。Azuma(1997)は、Miyagawa(1987)の以下の分類を用いて、これらの語彙の特徴を分析した。

Verb:	[+V、 - N]
Noun, Verbal Noun	[- V、 +N]
Adjective	[+V]
Adjectival noun	[+V、 +N]
Postposition	[- V、 - N]

(V=Verb、 N=Noun)

(Miyagawa 1987:30)

Miyagawa(1987)は、動詞を、名詞的要素を含む“verbal noun”と、含まない“verb”に分けた。Verbal noun は、名詞と同様の特徴を持つが、「する」を伴い動詞になる。形容詞については、名詞要素を含む“adjectival noun”、つまり形容動詞と、名詞要素を含まない“adjective”「形容詞」に分けている。この分類に従い、名詞要素を含むものは、その部分が英語に切り替えられるというのが Azuma(1997)の示した規則である。確かに、これまでの研究でも、「watch されて」(Nishimura 1995b)、「それは memorize すればいいし」(Azuma 1997)など、「英語の動詞+する」の形が数多く観察されている。しかし、「rewrite た」や「run ている」など、「する」なしでCSされることはない(Azuma 1997)。

Nishimura(1995b)は、「する動詞」に関して、本来、中国語を日本語の動詞として使うために、中国語の語彙に「する」を付けた形で、時制、アスペクト、ヴォイスなどは、すべて「する」で活用するという特徴があると説明している。つまり、「する」の前に来る英語の動詞は、活用しない「名詞扱い」ということになる。

形容動詞についても、「する動詞」と同様、名詞に「な」「だ」「で」などが付いた形と見ることができる。よって、「dirty などところだったね」など、名詞部分が英語へ切り替えられる。“dirty”自体は、日本語に訳すと「きたない」という形容詞になるが、形容詞は、名詞要素を持たないため、名詞として扱われ、形容動詞の一部に埋め込まれる。

これまで、日本語-英語のCSでは、文中の単語

レベルの割合が高いと言われてきたが(Foto 1990a; Nishimura 1995b)、Azuma(1997)がそれを規則として確立したことにより、どのような品詞が、どのような形で切り替え可能なかが明らかになった。また、名詞、形容詞、動詞というそれぞれの形に対応する説明には一貫性があり、理解しやすい。従来のCSの統語面の研究では、Poplack(1980)がスペイン語と英語間の制約を示したが、それは、言語間の相違に対応できないことが指摘されている。つまり、CSの統語的規則は、それぞれの言語を対象に、その言語の特徴を考慮したものが必要なのである。日本語と英語間のCSについても、その規則が示されたことで、統語面の研究の基盤ができたといえる。

6.2 社会的背景の特徴

移民社会でのCS使用には、社会背景が大きな要因となる。そこには、ダイグロシアが存在し、移民の言語より、多数派言語の方が高い社会的地位に置かれるという状況がある。しかし、日本で、英語話者の親を持ち、インターナショナルスクールに通う子どもたちには、明確なダイグロシアは存在しないという(Foto 1990a)。彼らは「移民」という立場ではなく、いわゆる「移民」とは状況が異なるが、二言語で生活しているという点は共通する。しかし、日本では、英語の社会的地位が高いため、移民に比べ、権威を示すために多数派言語である日本語を使ったり、英語の使用を抑制したりすることが少ないといわれている。

しかし、外国生活の後、日本社会への適応を求められる帰国子女の場合は状況が異なる。彼らは、適応がうまくいかないと、日本語を拒んだり、逆に、早く同化しようという気持ちから日本語以外の言語を使わないようにしたりするなど、心理的な面が言語選択に影響することが報告されている(上条・石黒・伊藤 1992)。これは、均一性を好む傾向にある日本社会で、二言語併用が受け入れられにくい状況を反映した現象だといえる。

6.3 語用論的特徴

日英のCS分析では、他の言語間のCS同様、様々な機能が報告されている。カナダの日系人のCSでは、場面や相手などが要因となる状況によるCSや、日系人同士のアイデンティティーの共有、引用、ドラマティックな効果をあげる、などコミュニケーション上の機能が観察された(Nishimura 1992, 1995a)。日本に住むバイリンガルの子どものCSに

も、繰り返しによる強調、明確化、注目の維持、客観的事実と感情表現の区別、ディスコース・マーカ―などの機能がある(Foto 1990a)。

しかし、日英の CS に特徴的な機能もある。Nishimura(1992, 1995a, 1995b)は、カナダの日系人が、英語をベースに話している際の日本語への CS を分析し、終助詞の使用が最も多く、その中でも、「ね」が最も頻繁に使われていることを報告している。日本語の話し言葉では、文が動詞で終わることは稀であり、ほとんどの文は、終助詞や助動詞で終わる(メイナード 1993; Martin 1975; Maynard 1989)。日系人の終助詞の多さは、このような特徴が関連していると思われる。

しかし、その切り替えは、単に言語的特徴によるものだけではない。終助詞は、話し手の確認要求や、質問、曖昧さなどの感情を表すが(Martin 1975)、特に「ね」、「よ」、「な」、「かな」などは、話し手の会話への関与を示す(メイナード 1993; Maynard 1989)。その中でも、「ね」には、確認や同意要求をし、相手との距離を縮める働きがある。つまり、日系人は、英語をベースとして会話をしながらも、CS により、相手に同意を求めたり、確認したりしながら、相手を巻き込む日本語のコミュニケーション・スタイルを採り入れているのである。

また、日系人は、相手の質問に対して、詳細を答えたくない場合に、「ちょっと」を使用し、そのときの話題から相手を遠ざけることがある(Nishimura 1992)。話題を避けたり、相手の申し出を断ったりすることは、相手のフェイスを脅かすものであり(Brown & Levinson 1987)、話し手はその表現に細心の注意を払う。このような場面で、英語に比べ、間接的に、曖昧さを残しながら、相手を話題から遠ざけることができる日本語の表現を使用することは、言語だけでなく、そのコミュニケーション・スタイルの切り替えも行われていることを表している。このように、日系人が、日本語に切り替えることにより、日本人の心理的な面を採り入れていることは、CS の機能の多様さを示しており、注目すべき点である。

一方、Foto(1990a)は、日本に住むバイリンガルの子どもが、客観的な事実と個人的な感情を区別する際に CS を使い、英語は感情表現のために使われる傾向があると報告している。その理由について、英語は、日本語と異なり、常に主語を明示する言語で

あるため(Kuno 1973)、より明確に自分の感情を示すことができるからではないかと述べている。この考察では、話し手の心理と日本語と英語の統語的特徴が関連付けられており、日英の CS 特有の現象として興味深い。

6.4 学習者を対象にした日英の CS

学習者の日英の CS に関しては、日本人英語学習者(以下、英語学習者)と日本語学習者を対象にした研究がある。バイリンガル・コミュニティの二言語話者と異なり、外国語学習者の二言語能力には差がある。英語学習者の場合、日本語は母語だが、英語は学習過程の言語である。一方、日本語学習者が日本人とコミュニケーションする場合は、言語環境が複雑である。日本語は、日本人にとって母語であるが、日本語学習者の能力は様々である。英語に関しては、日本で学ぶ日本語学習者の大半が、非英語圏出身者であるため、日本人も日本語学習者も非母語話者である。

こうした言語環境にいる学習者のコミュニケーションの中で、Foto(1990b)は、英語のクラスで行われたグループタスクにおける学習者間の英語から日本語への CS を分析し、英語能力、日本語能力が共に高いバイリンガルの子どもの CS と比較した。その結果、学習者は英語能力が低いにもかかわらず、切り替えを問題なく行ったこと、どちらのグループでも同じように、単語レベルの CS が最も多く使われたことがわかった。また、CS の機能についても、強調、意味の明確化、聞き手の注意の喚起、補足、また日本語の終助詞の使用による同意や同意要求、談話フレーム作り、などが共通していた。その中で、英語学習者特有の機能は、英語の発話を訂正するために日本語を使用する「修正」だったという。一方、バイリンガルの子どもに見られた他者の発話を引用するという機能は、英語学習者間では見られなかった。この相違には、クラスと家庭というコミュニケーションの場面や、話題の違いが影響しているという(Foto 1990b)。

Ogane(1997)は、英語クラスでの教師と学習者のやりとりを分析し、教師による文法や語彙の説明、学習者間の人間関係作りのために日本語への CS が機能しており、英語のクラスでの日本語使用をむやみに否定するべきではないと述べている。これは、他の外国語クラスでも報告されている結果と一致する(Cook 1999, 2001; Franklin 1990; Legenhausen 1991;

Macaro 1997) (5.1.2 参照)。

日本語学習者と日本人とのコミュニケーションにおける日英の CS については、自由会話場面を対象にした分析が多く(服部 2001; 久保田 2004)、いずれも、学習者が使う英語は、日本語の未習語彙の補償としてだけでなく、談話促進、強調など、コミュニケーション上の機能があることを実証した。また、田崎(2005)は、大学の講義におけるグループワークで、日本人学生と留学生が英語ベースで行ったコミュニケーションにおける日本語への CS の機能を分析し、CS によるコミュニケーションの促進が、グループワークの達成に貢献することを示した。日本人と日本語学習者間の英語から日本語への CS の機能分析は、これまでほとんどなく、この研究は、日本で使われる CS の可能性を広げたといえる。

こうした学習者を対象にした一連の研究は、学習者の CS の会話上の機能を明らかにした点で大きな意義がある。しかし、これらの研究は、CS の局所的な機能の分析、つまりミクロな視点からの分析にとどまり、マクロな視点から、社会背景などとの関連に触れたものはほとんどない。学習者には学習者の社会背景があるはずだ。バイリンガル・コミュニティの CS 研究でもいわれているように、こうした分析がなければ、CS の役割、位置づけを十分に説明することはできない。

6.5 まとめ

本章では、日英の CS について、バイリンガルと、学習者を対象にした研究を概観した。バイリンガルを対象にした分析では、日本語と英語間の CS が可能であることが実証され、その言語的、語用論的特徴も明らかになった。また、学習者を対象にした研究では、CS が目標言語の能力不足を補うだけでなく、英語クラスの活動や、談話促進を助ける働きをすることも示された。これらの知見は、日英の CS の可能性を広げただけでなく、今後の日英の CS 分析の基礎資料となる貴重な成果である。

7. 第二言語学習者を対象にした CS 研究に必要な視点

本稿の前半では、バイリンガル・コミュニティにおける CS 研究を概観した。それは、CS が、ある統語的規則に則って行われる言語交替であること、また、一言語だけではできないコミュニケーションの豊かさを作り出す手段であることを実証するための研究の歴史であったといえる。CS を使うこ

とで、二言語話者は、場面や相手に対応しながら、発話意図をよりの確に伝えていることがわかった。CS 使用は、二言語話者が作り出す相互理解への創造的なプロセスであるといえるだろう。

現在、多様な分野でグローバル化が進む中、多言語併用環境は増えつつあり、CS のあり方も様々である。従来のように、歴史的背景のあるバイリンガル・コミュニティだけではなく、学習者がビジネスマンや留学生という立場で参加している社会においても、CS は使われている。こうした多文化社会の現状と、これまで概観したバイリンガル・コミュニティ、第二言語学習者の CS 研究の動向を踏まえて、主に留学生を念頭においた日本語学習者と日本人学生のコミュニケーションにおける CS 研究に必要な視点をまとめてみたい。

まず、第一に、対象を限定することの重要性を述べたい。バイリンガル・コミュニティを対象にした CS 研究の多くは、コミュニティによって CS の規範が異なることを強調している。したがって、学習者の CS 研究においても、その社会背景、参与者の二言語の能力、社会的立場などを踏まえた上で、そこに存在するコミュニティ独自の規範を見いだしていかなければならない。例えば、日本の大学の場合では、日本人学生と留学生がコミュニケーションを行う必要性、両者の英語能力、留学生の日本語能力、英語使用に対する参与者の態度や大学の環境(参与者は英語使用をどのように思っているか、大学は英語使用を奨励しているか、など)も、CS 使用に影響する要因となる。

第二に、CS の働きは、コンテキスト化の合図や参与者の立場の変化など、やりとりの中で明らかになることが多いため、その機能分析では、実際の談話資料をもとに、前後の発話との関連、CS が談話展開に与える影響などを詳細に分析する必要がある。また、目標言語の能力を補うために使われることが多い学習者の CS の機能に関しては、それが、コミュニケーションの達成をどのように助けるかが重要な視点となる。その達成を見るためには、コミュニケーションの目的も考慮しなければならない。第三に、学習者の CS には、コミュニケーションへの積極的な参加方法という面と、目標言語の習得を妨げる行為という二つの側面があることを認識する必要がある。そして、学習者のコミュニケーションをどのように捉えるのか、CS をコミュニケーション上

どのように位置づけるのかという観点を明確にした上で、CS 分析を行うことが重要である。留学生の場合を考えると、習得を最優先にする日本語の教室内のコミュニケーションと、ゼミなどで、専門の知識を深めるために行うディスカッションでは、求められることに相違がある。こうした点を考慮し CS の役割を捉えなければならない。第四に、バイリンガル・コミュニティの CS 分析と異なり、従来の学習者の CS 研究では、学習者のみ、つまり、一方の話者のみの分析が多かったが、コミュニケーションを協働構築と捉えた場合、母語話者の行為にも注目する必要がある。日本人学生はどのようなときに CS を使うか、留学生の CS された発話に対してどのように応答するか、なども分析の対象とするべきである。第五に、学習者の CS を言語学的に分析する場合は、学習者の言語能力を考慮した学習者特有の統語的特徴を見ることが求められるであろう。

最後に、先行研究では、学習者の CS の効果的な面が強調される傾向が強かったが、CS は常に有効に働くのかという疑問について述べたい。CS が、発話意図の解釈や、アイデンティティーの共有など人間関係の構築、調整を助けるものとしたら、使い方によっては、逆に、コミュニケーション、または人間関係を損なう要因となる可能性もあるだろう。特に、学習者を対象にした CS の場合、バイリンガル・コミュニティのように CS の規範が存在しないため、CS が聞き手に対して不快感を与える危険性もある。例えば、留学生が流暢な英語を過度に使用した場合、抵抗を感じる日本人学生もいるかもしれない。こうした否定的な側面も直視し、その要因も含めて分析しなければ、CS の真の機能は解明できない。今後、学習者を対象にした CS 分析を行う際に不可欠な視点である。

8. おわりに

本稿では、日本語学習者の中でも、特に、大学で学ぶ留学生を対象に、彼らが日本人学生と、同じ大学生として、対等にコミュニケーションを行う必要性を踏まえ、コミュニケーションを促進させる手段として CS を捉えた。しかし、言うまでもなく、CS の使用は、大学に限ったことではない。外国人居住者が増加し、彼らとの共生が課題となっている日本社会では、職場や地域活動においても使われる可能性がある。外国人居住者の多くは日本語学習過程に

あり、その能力は限られている。しかし、彼らも、日本人と共に働き、社会の成員として生活していかなければならず、留学生同様、言語能力の差を越えて、日本人と対等にコミュニケーションに参加する必要がある。こうした必要性が高まれば、今後、接触場面のコミュニケーションでは、学習者の日本語能力に頼るだけでなく、日本人と学習者がお互いの言語能力を最大限に使い、協力してコミュニケーションを達成させるという方法も広がっていくだろう。それは、日本語と英語の使用には限らない。外国語学習への関心が高まっている中、彼らの母語を話す日本人も増えているはずだ。その場合、日本語と学習者の母語の間で CS が使われることも考えられる。

様々な社会的場面で行われる日本人と学習者のコミュニケーションの CS を分析することにより、日本人と学習者が、ともに「バイリンガル」としてコミュニケーションを達成する効果的な方法を解明することができれば、彼らのコミュニケーションの促進を助けることができる。そのためには、前述した研究の視点を発展させ、課題に応えつつ、さらなる実証的研究を重ねていく必要がある。

注

1. Myer-Scotton(1993, 1998)は、“content morphemes”と“system morphemes”、Garrett(1990)は、“open class items”と“closed class items”という用語を使用しているが、Myer-Scotton(1993)も述べているように、“closed class items”は、“system morphemes”とほぼ同義語に使われている。また、これら2つの用語は、“bound morphemes”と、“content morphemes”は、“free morphemes”と共通する部分が多いが、“system morphemes”には、テーマと関連の深い前置詞も含まれるなど、相違も見られる。よって、本稿では、研究者の意図を尊重し、それぞれの研究者の用語をそのまま使用することとする。

参考文献

- 石井敏・岡部朗一・久米昭元(1996)『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件—』有斐閣
- 大平未央子(2001)「ネイティブスピーカー再考」野呂香代子・山下仁(編)『「正しさ」への問い：批判的社会言語学の試み』三元社 85-110.
- 岡秀夫(1995)「バイリンガリズムの観点からみた外国語能力」『Language Information』東京大学大学院総合文化研究科 145-153.
- 岡秀夫(1997)「コードスイッチングをめぐる諸問題」広島大学英語教育研究室(編)『松村幹雄先生ご退官記念論文集』淡水社 122-133.

- 岡秀夫 (2002) 「バイリンガリズムと言語教育」 上田博人 (編) 『日本語学と言語教育』 東京大学出版会 95-120.
- 上條雅子・石黒敏明・伊藤克敏 (1992) 「帰国子女の言語習得・喪失過程」 『神奈川大学言語研究』 14, 32-42.
- 久保田満里子 (2004) 「英語話者が日本語でコミュニケーションする際生じる問題」 宮崎里司・ヘレン・マリオット (編) 『接触場面と日本語教育—ネウストブニーのインパクト—』 明治書院 185-196.
- 田崎敦子 (2005) 「英語から日本語へのコード・スイッチング—接触場面のグループワークにおける機能の観点から—」 『異文化間教育』 22, 110-120.
- 長友和彦 (2003) 『三言語併用環境における日本語の発達に関する研究』 平成 14~15 年度科研(萌芽研究) 番号 14658077 研究成果報告書
- ナカミズ, エレン (1996) 「日本在住ブラジル人労働者における社会的ネットワークと日本語の使用」 『阪大日本語研究』 8, 57-71.
- 八田洋子 (2000) 「世界における英語の位置」 『文教大学文学部紀要』 14(2), 57-82.
- 服部圭子 (2001) 「接触場面における日本語非母語話者のコードスイッチング機能を中心に—」 『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』 5, 39-58.
- 三牧陽子 (2006) 『大学コミュニティにおける留学生のコミュニケーションに関する研究』 平成 14 年度~平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書
メイナード・泉子 (1993) 『会話分析』 くろしお出版
- Appel, R. & Muysken, P. (1987) *Language contact and bilingualism*, London: Edward Arnold.
- Aston, G. (1986) Trouble-shooting in interaction with learners: the more the merrier?, *Applied Linguistics*, 7, 2, 128-143.
- Auer, P. (1984) *Bilingual conversation*, Amsterdam: John Benjamins.
- Auer, P. (1995) The pragmatics of code-switching, In L. Milroy & P. Muysken, *One speaker, two languages: Cross-disciplinary perspectives on code-switching*, Cambridge: Cambridge University Press, 115-135.
- Auer, P. (2000) A conversation analytic approach to code-switching and transfer, In L. Wei (Ed.), *The Bilingualism reader*, London: Routledge, 261-279.
- Azuma, S. (1993) The frame-content hypothesis in speech production: Evidence from intrasentential code switching, *Linguistics*, 31, 1071-1093.
- Azuma, S. (1996) Speech production units among bilinguals, *Journal of Psycholinguistic Research*, 25, 397-416.
- Azuma, S. (1997) Lexical categories and code-switching: a study of Japanese/English code-switching in Japan, *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, 31, 1-21.
- Bachman, L. F. (1990) *Fundamental considerations in language testing*, Oxford: Oxford University Press.
- Baker, C. (1993) *Foundations of bilingual education and bilingualism*, Clevedon: Multilingual Matters. (岡秀夫 (訳) 2002 『バイリンガル教育と第二言語習得』 大修館書店)
- Bamford, D. C. (1970) A transactional model of communication, In K. Sereno & C. D. Mortensen (Eds.), *Foundations of communication theory*, NY: Harper & Row, 83-102.
- Benson, E. (2001) The neglected early history of codeswitching research in the United States, *Language & Communication*, 21, 23-36.
- Bentahila, A. & Davies, E. (1983) *Language attitudes among Arabic-French bilinguals in Morocco*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Bentahila, A. & Davies, E. (1992) Code-switching and language dominance, In R. J. Harris (Ed.), *Cognitive processing in bilinguals*, North-Holland: Elsevier Science Publishers B.V., 443-459.
- Bentahila, A. & Davies, E. (1995). Patterns of code-switching and patterns of language contact, *Lingua*, 96, 75-93.
- Berelson, B. & Steiner, F. A. (1964) *Human behavior*, NY: Brace & World.
- Berk-Selingson, S. (1986) Linguistic constraints on intrasentential code-switching: A study of Spanish/Hebrew bilingualism, *Language in Society*, 15, 313-348.
- Bialystok, E. (1990) *Communication strategies*, Cambridge: Basil Blackwell.
- Blom, P. & Gumperz, J. J. (1972) Social meaning in linguistic structures: Codeswitching in Norway, In J. J. Gumperz and D. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics*, NY: Holt, Rinehart and Winston, 407-34.
- Bloomfield, Leonard (1933) *Language*, NY: Holt. (三宅鴻・日野資純(訳) 1962 『言語』 大修館書店)
- Bock, K. (1991) A sketchbook of production problems, *Journal of Psycholinguistic Research*, 20, 141-160.
- Boeschoten, H. E. & Verhoeven, L. (1987) Language mixing in children's speech, *Language Learning*, 37, 191-215.
- Bokamba, E. (1988) Code-mixing, language variation, and linguistic theory: Evidence from Bantu language, *Lingua*, 76, 21-623.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, UK: Cambridge University Press.
- Burgoon, M. & Ruffner, M. (1978) *Human communication*, NY: Holt, Rinehart, & Winston.
- Canale, M. & Swain M. (1980) Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing, *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- Canale, M. (1983) From communicative competence to communicative language pedagogy, In J. Richards & R. Schmidt (Eds.), *Language and communication*, London: Longman, 2-27.
- Carroll, B. J. (1980). *Testing communicative performance*, London: Pergamon Institute of English.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, MA: MIT Press. (安井稔(訳) 1970 『文法理論の諸相』

研究社)

- Cook, V. (1999) Going beyond the native speaker in language teaching, *TESOL Quarterly*, 33, 185-209.
- Cook, V. (2001) *Second language learning and language teaching*, NY: Oxford University Press.
- Crystal, D. (1998) *English as a global language*, UK: Cambridge University Press.
- Dewey, J. & Bentley, A. F. (1973) Knowing and the known, In R. Handy & E. C. Harwood (Eds.), *Useful procedures of inquiry, great barrington*, MA: Behavioral Research Council, 94-209.
- Dörnyei, Z. & Scott, M. L. (1995) On the teachability of communication strategies, *TESOL Quarterly*, 29, 55-85.
- Ellis, R. (1989) Sources of intra-learner variability in language use and their relationship to second language acquisition, In S. Gass (Ed.), *Psycholinguistic issues*, Clevedon: Multilingual Matters, 22-45.
- Faerch, C. & Kasper, G. (1983) Plans and strategies in foreign language communication, In C. Faerch & G. Kasper (Eds.), *Strategies in interlanguage communication*, UK: Longman.
- Firth, A. & Wagner, J. (1997) On Discourse, communication, and fundamental concepts in SLA research, *The Modern Language Journal*, 81, 285-300.
- Fishman, J. A. (1971) The sociology of language, In J. Fishman (Ed.), *Advances in the sociology of language*, The Hague: Mouton, 217-404.
- Fotos, S. (1990a) Japanese-English codeswitching in bilingual children, *JALT Journal*, 12, 75-97.
- Fotos, S. (1990b) Japanese-English conversational codeswitching in balanced and limited proficiency bilinguals, *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, 1, online edition.
- Franklin, C. E. M. (1990) Teaching in the target language, *Language Learning Journal*, September, 20-24.
- Gardner-Chloros, P. (1991) *Language selection and switching in Strasbourg*, Oxford: Clarendon.
- Gardner-Chloros, P. (1995) Codeswitching in community, regional and national repertoires: The myth of the discreteness of linguistic systems, In L. Milroy & P. Muysken (Eds.), *One speaker, two languages: Cross-disciplinary perspectives on codeswitching*, Cambridge: Cambridge University Press, 68-89.
- Garrett, M. F. (1990) Sentence processing, In D. Osherson & H. Lasnik, (Eds.), *An invitation to cognitive science*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Gass, S. M. & Varonis, E. M. (1985) Task variation and nonnative /nonnative negotiation of meaning, In Gass, M. Susan and Madden, G. Carolyn (Eds.), *Input in second language acquisition*, MA: Newbury House, 149-161.
- Goffman, E. (1974) *Frame analysis: An essay on the organization of experience*, Boston: Northeastern University Press.
- Goffman, E. (1981) *Forms of talk*, PA: University of Pennsylvania Press, 124-159.
- Grice, H. P. (1975) Logic and conversation, In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics*, 3, *Speech acts*, NY: Academic Press, 41-58.
- Grosjean, G. (1982) *Life with two languages*, MA: Harvard University Press.
- Grosjean, F. (1985) The bilingual as a competent but specific speaker-hearer, *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 6, 467-477.
- Gumperz, J. & Hernandez-Chavez, E. (1972) Bilingualism, bidialectalism, and classroom interaction, In C. Cazden, V. John, & D. Hymes (Eds.), *Functions of language in the classroom*, NY: Teachers College Press, 84-108.
- Gumperz, J. J. (1982) Conversational code switching, In J. Gumperz (Ed.), *Discourse strategies*, Cambridge: Cambridge University Press, 59-99. (井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘(訳)2004『認知と相互行為の社会言語学』松柏社)
- Hall, J. K. (1995) (Re)creating our worlds with words: A sociohistorical perspective of face-to-face interaction, *Applied Linguistics*, 16, 206-232.
- Heller, M. (1988) *Codeswitching*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Higgins, E. (1992) Achieving 'shared reality' in the communication game: A social action that creates meaning, *Journal of Language and Social Psychology*, 11, 107-131.
- Hoffman, C. (1991) *An introduction to bilingualism*, Essex, UK: Longman.
- Hymes, D. (1972) On communicative competence, In J. B. Pride & J. Holmes, (Eds.), *Sociolinguistics*, Harmondsworth, England: Penguin Books.
- Jacobson, R. (1990) *Codeswitching as a Worldwide Phenomenon*, NY: Peter Lang.
- Jacoby, S. & Oches, E. (1995) Co-construction: An introduction, *Research on Language and Social Interaction*, 28(3), 171-183.
- Kachru, B. (1978) Code-mixing as a communicative strategy in India, In J. Alatis(Ed.), *International dimensions of bilingual education*, Washington, DC: Georgetown University Press, 107-124.
- Kachru, B. (1978) Toward structuring code-mixing: An Indian perspective, *International Journal of the Sociology of Language*, 16, 27-46.
- Kachru, B. (1992) Teaching world Englishes, In B. Kachru (Ed.), *The other tongue, English across cultures*, 2nd ed., IL: University of Illinois Press.
- Kasper, G. & Blum-Kulla, S. (1993) *Interlanguage pragmatics*, NY: Oxford University Press.
- Kramsch, C. (1986) From language proficiency to interactional competence, *Modern Language Journal*, 70, 366-372.
- Kramsh, C. (1998) *Language and culture*, Oxford: Oxford University Press.

- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese language*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Lasswell, H. (1964) The structure and function of communication in society, In L. Bryson (Ed.), *The Communication of ideas*, NY: Cooper Square, 37-51.
- Leech, G. (1983) *Principles of pragmatics*, NY: Longman.
- Legenhauen, L. (1991) Code-switching in learners' discourse, *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 1, 61-73.
- Levelt, W.J.M. (1989) *Speaking, from intention to articulation*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Levelt, W. J. M. (1992) Accessing words in speech production: Stages, processes and representations, *Cognition*, 42, 1-22.
- Lindholm, K. J. & Padilla, A. M. (1978) Language mixing in bilingual children, *Journal of Child Language*, 5, 327-35.
- Long, M. (1983) Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers, *Studies in Second Language Acquisition*, 5, 177-193.
- Loschky, M. (1989) A syntactic analysis of English-Japanese intrasentential code-switching, *Paper presented at the 28th annual convention of the Japan association of college English Teachers*, Kyushu, Japan.
- Macaro, E. (1997) *Target language, collaborative learning and autonomy*, Clevedon, Avon: Multilingual Matters.
- Maher, J.・八代京子 (1991) 『日本の帰国子女』 研究社
- Martin, S. E.. (1975) *A Reference grammar of Japanese*, New Haven: Yale University Press.
- Maynard, S. (1989) *Japanese conversation*, Norwood, NJ: Ablex.
- McClure, E. (1981) Formal and functional aspects of the codeswitched discourse of bilingual children, In R. Duran (Ed.), *Latino language and communicative Behavior*, Norwood, NJ: ABLEX Publishing Company, 69-94.
- McClure, E. & McClure, M. (1988) Macro-and micro-sociolinguistic dimensions of codeswitching in Vingar, In H. Monica (Ed.), *Codeswitching: Anthropological and sociolinguistic perspectives*, Mouton de Gruyter, 25-51.
- McGroarty, M. (1998) Constructive and constructivist challenges for applied linguistics, *Language Learning*, 48(4), 591-622.
- Meisel, J. (1994) Code-switching in young bilingual children: The acquisition of grammatical constrains, *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 381-412.
- Miller, K. (2002) Conceptual foundations-What is communication?-, In K. Miller(Ed.), *Communication theories-perspectives, processes, and contexts-*, NY: McGraw-Hill Higher Education, 2-173.
- Miyagawa, S. (1987) Lexical categories in Japanese, *Lingua*, 73, 29-51.
- Mühlhäusler, P. (1980) Structural expansion and the process of creolization, In A. Valdman & A. Highfield, (Eds.), *Theoretical orientations in creole studies*, London: Academic Press, 19-56.
- Muysken, P. (1997) Codésitching processes: Alternation, insertion, congruent lexicalization, In M. Pütz (Ed.), *Language choices: C Conditions, constraints, and consequences*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 361-380.
- Myers-Scotton, C. (1988) Code switching as indexical of social negotiations, In M. Heller (Ed.), *Codeswitching: Anthropological and sociolinguistic perspectives*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Myers-Scotton, C. (1990) Codeswitching with English: types of switching, types of communities, *World Englishes*, 8, 333-346.
- Myers-Scotton, C. (1992) Comparing codeswitching and borrowing, In C. Eastman (Ed.), *Codeswitching: Special issue of journal of multilingual and multicultural development* 13, Clevedon: Multilingual Matters, 19-40.
- Myers-Scotton, C. (1993a) *Duelling two languages: Grammatical structure in codeswitching*, NY: Oxford University Press.
- Myers-Scotton, C. (1993b) Common and uncommon ground: Social and structural factors in codeswitching, *Language in Society*, 22, 475-503.
- Myers-Scotton, C. & Jake, J. L. (1995) Matching lemmas in a bilingual language competence and production model: Evidence from intrasentential codeswitching, *Linguistics*, 33, 981-1024.
- Myers-Scotton, C. (1998) Structural uniformities vs. community differences in codeswitching, In R. Jacobson (Ed.), *Codeswitching worldwide, trends in linguistics 106*, Berlin: Mouton de Gruyter, 91-108.
- Myers-Scotton, C. (2002) *Contact linguistics*, Oxford: Oxford University Press.
- Nartey, J. (1992) Codeswitching, interference, or faddism? Language use among educated Ghanaians, *Anthropological Linguistics*, 24, 183-193.
- Nishimura, M. (1992) Language choice and in-group identity among Canadian niseis, *Journal of Asian Pacific Communication*, 3, 97-113.
- Nishimura, M. (1995a) A functional analysis of Japanese/English code-switching, *Journal of Pragmatics*, 23, 157-181.
- Nishimura, M. (1995b) Varietal conditioning Japanese/English code-switching, *Language Sciences*, 17, 123-145.
- Nishimura, M. (1997) *Japanese/English code-switching: Syntax and pragmatics*, NY: Peter Lang.
- Nortier, J. (1990) *Dutch-Moroccan Arabic code-switching*, Dordrecht: Foris.
- Ogane, E. (1997) Codeswitching in EFL learner discourse, *JALT Journal*, 19, 106-122.
- Pfaff, C. (1976) Functional and structural constraints on syntactic variation in code-switching, In S. B. Steever, C. A. Walker & S. S. Mufwene, (Eds.), *Papers from the parasession on diachronic syntax*, Chicago: Chicago Linguistic Society, 248-59.

- Pfaff, C. (1979) Constraints on language mixing: Intrasentential code-switching and borrowing in Spanish/English, *Language*, 55, 291-318.
- Pfaff, C. (1997) Contacts and conflicts: Perspectives from codeswitching research, In M. Pütz(Ed.), *Language choices? Conditions, constraints, and consequences*, Amsterdam: John Benjamins, 361-380.
- Pica, T., Holliday, L., Lewis, N. & Morgenthaler, L. (1989) Comprehensible output as an outcome of linguistic demands on the learner, *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 63-90.
- Poplack, S. (1980) Sometimes, I'll start a sentence in Spanish y termino en Espanol: toward a typology of code-switching, *Linguistics*, 18, 518-618.
- Poplack, S. (1981) Syntactic structure and social functions of codeswitching, In R. Duran (Ed.), *Latino language and communicative behavior*, Norwood NJ: Ablex, 169-184.
- Poplack, S. (1988) Contrasting patterns of codeswitching in two communities, In M.Heller (Ed.), *Codeswitching: Sociolinguistic perspectives*, Berlin: Mouton de Gruyter, 215-44.
- Poplack, S., Wheeler, S. & Westwood, A. (1989) Distinguishing language contact phenomena: evidence from Finnish-English bilingualism, *World Englishes*, 8, 389-406.
- Poullisse, N. (1993) A theoretical account of lexical communication strategies, In R. Schreuder & B. Weltens (Eds.), *The Bilingual lexicon*, Amsterdam: John Benjamins, 157-189.
- Poullisse, N. (1997) Compensatory strategies and the principles of clarity and economy, In G Kasper & E. Kellerman, *Communication strategies: Psycholinguistic and sociolinguistic perspectives*, London: Longman, 49-64.
- Rampton, B. (1990) Displacing the 'native speaker': Expertise, affiliation and inheritance, *ELT Journal*, 44, 2, 338-343.
- Rampton, B. (1997) Sociolinguistic perspective on L2 communication strategies, In G Kasper & E. Kellerman, *Communication strategies: Psycholinguistic and sociolinguistic perspectives*, London: Longman, 279-303.
- Rich, S. (2006) Exploring strategic competence, developing teachers. Com,
http://www.developingteachers.com/articles_tchtraining/strat1_sam.htm.
- Romaine, S. (1994) *Bilingualism*, Oxford: Blackwell.
- Sankoff, D. & Poplack, S. (1981) A formal grammar for code-switching, *Papers in Linguistics*, 14, 3-46.
- Sankoff, D. Poplack, S. & Vanniarajan, S. (1990) The case of the nonce loan in Tamil, *Language Variation and Change*, 2, 71-101.
- Schiffrin, D. (1987) *Discourse markers*, NY: Cambridge University Press.
- Shannon, C., & Weaver, W. (1949) *The Mathematical theory of communication*, IL: University of Illinois Press.
- Siegel, J. (1995) How to get a laugh in Fijian: Code-switching and humor, *Language in Society*, 24, 95-110.
- Sridhar, S. N. (1978) On the function of code-mixing in Kannada, *International Journal of the Sociology of Language*, 16, 109-118.
- Sridhar, K. & Sridhar, K. (1980) The syntax and psycholinguistics of bilingual code mixing, *Studies in the Linguistic Sciences*, 10, 203-215.
- Tannen, D. (1984) *Conversational style*, NJ: Ablex.
- Tarone, E. (1977) Conscious communication strategies in interlanguage: A progress report, In H. Brown, C. Yorio, & R. Crymes (Eds.), *On TESOL'77*, Washington, D.C. TESOL.
- Tarone, E. (1983) Some thoughts on the notion of communication strategy, In F. Claus & K. Gabriel (Eds.), *Strategies in interlanguage communication*, London: Longman, 61-74.
- Trosset, C. S. (1986) The social identity of Welsh learners, *Language in Society*, 15, 165- 192.
- Ure, J. (1974) Code-switching and mixed speech in the register systems of developing languages, In A. Verdoodt(Ed.), *Association internationale de linguistique appliquee third congress Copenhagen 1972 proceedings, volume II: Applied sociolinguistics*, Heidelberg, Germany: Julius Groos Verlag, 222-239.
- Valdés, G & Figueroa, R. (1994) *Bilingualism and testing: A special case of bias*, Norwood, NJ: Ablex.
- Wagner, J. (1983) Dann du tagen eineeeee-weisse Platte- An analysis of interlanguage communication in instruction, In C. Faerch & G Kasper (Eds.), *Strategies in interlanguage communication*, London: Longman, 159-174.
- Wei, L. (1994) *Three generations two languages one family*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Weinreich, U. (1968) *Languages in contact: Findings and problems*, The Hague: Mouton.
- Williams, J., Inscoc, R & Tasker, T. (1997) Sociolinguistic perspective on L2 communication strategies, In G Kasper & E.Kellerman, *Communication strategies: Psycholinguistic and sociolinguistic perspectives*, London: Longman, 304-322.
- Young, R. (1999) Sociolinguistic approaches to SAL, *Annual Review of Applied Linguistics*, 19, 105-132

たさき あつこ／東京農工大学留学生センター
tasaki@cc.tuat.ac.jp

An Overview of Studies on Codeswitching: For Analysis of Communication in Multilingual Societies

TASAKI Atsuko

Abstract

This paper reviews studies on codeswitching(CS) for people living in bilingual societies which were colonized, or accept immigrants, and provides an overview of how CS has been considered and evaluated in second language acquisition research. Knowledge and viewpoints of analysis accumulated in the research on CS in bilingual societies can be applied to the research of CS for second language learners. In addition, this paper reviews studies on CS between Japanese and English in order to help with future analysis of second language learners of Japanese using English for communication with Japanese people. The target of learners of Japanese in this paper is international students studying at university, who have limited Japanese language proficiency, and overcome it by using English to communicate with Japanese teachers and students for their study and research.

Before reviewing studies on CS, this paper points out the necessity to define CS and types of CS in terms of purposes and viewpoints of each study since its definitions are varied with researchers. Then, the studies on CS in bilingual societies are reviewed from a linguistic and sociolinguistic approach. The main intent of the linguistic approach is to explain syntactic rules of CS. It is achievements of the linguistic approach to indicate CS happens not at random, but regularly following some rules. However, the rules can be applied only to specific languages, and cannot explain general linguistic environments of CS.

The sociolinguistic approach aims to describe functions of CS in communication. Bilingual speakers switch languages according to situations, its related topics, and listeners. Also, they choose a specific language to show their social status, knowledge, and authority. In the process of interaction, CS is also used to convey speakers' intention and emotion clearly and vividly. The results of the sociolinguistic approach indicate that CS is reflected by speakers' social backgrounds, and it is a means of communication for bilingual speakers. For the analysis, therefore, it is important to consider social backgrounds and contexts where CS is used.

Next, an overview of studies on CS in second language acquisition(SLA). CS is categorized into a part of communication strategies in SLA, and helps learners to achieve their communicative goals without interaction with interlocutors. However, learners who use CS will need to confirm with interlocutors to understand meanings of CS, or use CS to ask for help to gain expressions in the target language. Therefore, CS should be analyzed in terms of interaction with listeners.

The evaluation of CS in SLA depends on how communicative competence is defined. According to a definition which regards linguistic competence most important, CS is evaluated negatively because it is considered as a lack of vocabulary. As communicative competence is defined with more consideration of interaction with interlocutors, the evaluation of CS has been changed. Communication between native and nonnative speakers comes to be regarded as more interdependent activities, cooperating to use their language skills. In terms of this interaction competence, CS can be a part of their communication style, and second language learners who can use CS can be respected as "bilingual speakers" instead of speakers with limited proficiency of the target language. This is an important perspective to analyze communication from in today's global society where second language learners work and study with native speakers equally.

Lastly, this paper reviews research on CS between Japanese and English for immigrants living in English-speaking countries, students whose parents are native English speakers in Japan, and have experienced living in foreign countries. In addition, it discusses CS for second language learners of English and Japanese in Japan. Those studies indicate that CS between Japanese and English has its unique functions as well as the same functions as seen in other languages, and some semantic rules applied only to CS between Japanese and English.

The studies on CS by second language learners lack analysis of their social backgrounds, language proficiency, and communicative goals. As a result, their achievements describe only local functions of CS in communication; the backgrounds and roles of CS are not made clear, such as why speakers use CS, how interlocutors react to CS and how CS can contribute to achieve a communicative goal. At the same time, negative influence of CS should be analyzed to see effects of CS in learners' communication.

Nonnative speakers' rights should be protected to express themselves and communicate with native speakers equally in today's global society. CS will be more important in multilingual society since it is a means for native and nonnative speakers to cooperate to understand each other. As English as an "international language" has been used, Japanese people and learners of Japanese will improve their English skills, and they will use CS between Japanese and English more frequently. Research on CS should be conducted to show the effective way of each language, and how it can enhance communication between native and nonnative speakers of Japanese.

【Keywords】 bilingual speakers, second language learners, international students, communicative competence, English

(International Student Center, Tokyo University of Agriculture and Technology)